
異世界チェンジリング

空月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界チェンジリング

【Nコード】

N5674W

【作者名】

空月

【あらすじ】

悲痛な声に導かれ、目覚めれば知らない天井が。いかにもファンタジーなこの身体、明らかに自分のじゃないんだけど…って、エルフ？しかも無性体？なんか色々面倒な事情があるみたいだけど、とりあえず旅に出ないといけないらしい。魔法使いと勇者＋αが幼馴染だとか、いったいどのRPGですか？

——ワケありでハイスペックな魔法使いの身体に憑依トリップ（もどき）した拳句、身体を持ち主の幼馴染と『魔王』を倒すための旅

に出たり何やらややこしい事情に強制的に巻き込まれちゃったりする、平凡だったはずの女の子の物語。

別所にて連載中のものの転載です。厳密にはボーイズラブ要素はありませんが、設定上それに近いものが感じられるかもしれません。

前夜

——もう、時間がない。

己の身体に刻まれた忌わしき印を見遣り、嘆息する。闇夜でも煌く銀髪がさらりと肩を滑った。

衣服の袷を元通りにし、静かに立ち上がる。

チャンスは一度。失敗すれば、二度とこの術を使うことは出来ないだろう。そうして無慈悲な運命の輪が廻るのだ。

深く、息を吐いた。指を宙に滑らせると、その軌跡が淡い青の光となって残る。

脳裏に鮮明に在る魔法陣を、寸分の狂いもなく指先で辿る。

これが自分に許された最後の賭けだと知っているから、祈るような気持ちでひたすらに陣を描いた。

そうして最後の連結を成した瞬間、魔法陣は質量を持たない図形から、世界と世界を繋ぐ『門』へと変化し――。

決して交わるはずのない世界が、繋がった。

邂逅

すまない、と誰かが囁いた。

それはそれは悲痛な声で、聞いてるだけの私ですら妙に胸が痛くなるような、悲哀に満ちた声だった。

『謝って許されることではないのは分かっている。けれど私には他に成す術がない。』

住み慣れた地を離れることがどれほどに辛いのか、君を慈しむ者達から君を引き離すことがどれほどに罪深いか、それを分かっている。尚、私はこの手段を選んだ。

出来る限りのことはしたつもりだ。それでも足りないことは分かっている。けれどももう猶予はないのだ。

すまない。……本当に、すまない。』

……いやなんかよくわかんないけど、そんな今にも罪悪感とかで死にそうになるほどじゃないと思うよ。のっぴきならない理由があるんだろって言うのは何となく分かるし。

とりあえず衣食住が何とかなれば、人間には適応能力とか順応性とかあるし、住めば都ってという言葉もあることだし、多分大丈夫だよ。根拠ないけど。

『君は、優しい。その優しさを私は利用しようとしている。』

……幾らでも罵ってくれて構わない。全ては私と、——私の種族の罪だ。本来なら関わることなく生を終えるはずだった君を巻き込んだ責は負おう。

お願いだ。見捨てないでくれ、私の世界を』

えええ、いきなり世界とかグローバルなもの出されても困るよ！
こっちは平凡な小市民だよ！？

あ、でも小心者だから罵るとかしないから。っていうか種族って何。まさか人間じゃないんですかあなた。

深い深い、青色の——悔恨を秘めた深海の瞳と、銀色の髪、が。
私の意識に灼きついて、そうしてひとこと。

『チェンジリング』

それが、全ての始まりだった。

はじまりの日

目が覚めたら、知らない天井が見えた。

「ッ!？」

一気に覚醒して身体を起こす。……って、なんか節々が痛い。
怪訝に思って自分の身体を見下ろして、さらに驚いた。

「なに、この服……」

私はいつも通り、パジャマに着替えて寝たはずだ。間違っても裾がひらひらで且つあちこちに細かい刺繍が入ってる——いかにもフアンタジーでコスプレチックな服を着た覚えはない。

というか私は床に寝ていたらしい。道理で身体が痛いわけだ。
…あれ？

視界の端を掠めた銀色に、思考が止まった。それはさらりと肩を滑り、胸に落ちてくる。いやいや、ちょっと待ってこれはもしかして。

……髪の毛？

いやいやいやそんなはずは。私髪染めたり脱色したりしてないし。もし染めるとしても銀髪なんて難易度高いのに挑戦したりしない。一歩間違えば白髪じゃないか。

とりあえずその銀色の束を引っ張ってみた。……頭皮が引き攣れる特有の痛みが襲ってくる。思い切り引っ張ったのでちょっと涙目になった。

マジですか。

夢だったりしないだろうかと思いながら自分が寝ていたらしい部屋を見回す。鏡っぱいものを見つけて、それに駆け寄った。

それに映し出されたのは――。

「誰これ……」

胸の中ほどまでの長さの銀髪に、深い青色の瞳。いつそ幻想的なまでの白い肌。初対面だったら「何この美形。神様気合入れすぎ」
とも思いそうなほど整った顔。

そして極めつけは、銀髪の隙間から覗く尖った耳。

ファンタジー小説、もしくはRPGにでも出てきそうなその外見に、私の思考は今度こそ停止した。

けれど幸か不幸か、その瞬間に闖入者は現れた。

「おい、シーファア？」

どンドン、と扉を叩く音。我に返った私が音の発生源の方を見ると、その扉が開くのは同時だった。

「ああ、起きてるじゃないか。返事位しろ」

現れたのは金髪碧眼のいかにもな西洋風美形だった。っていうか誰。

「？ どうした。目え開けたまま寝てるとかか？」

反応を示さない私に不思議そうな目線を向けながら、その人はずかずかと部屋に上がりこんで近づいてくる。

「シーファア？」

それが自分に向けられた呼びかけだと気付くのに数秒かった。
馴染みのない名前——けれど私は『知っていた』。

シーファ・イザン。それがこの身体の名前だと。

そう認識した瞬間のことを、どう表せばいいだろう。

知らないはずの記憶、知らないはずの知識、そういうものが奔流のように頭の中に溢れ出てきて、何もかも——『私』そのものが——瞬喪失される感覚。

その感覚から解放され、そうして目の前の人物を認識して私は言葉为零した。

「レアルード……？」

「なんだ？」

知らないはずの人、なのに。私は彼の名を知っていた。間違いく異常事態に見舞われていることに、今更ながら愕然とする。

そんな私の顔を覗き込む男——『レアルード』。

「具合でも悪いのか？　なんか変だぞ」

前半は見当違いだけど、後半は当たり前だ。だって私はレアルードの知る『シーファ』じゃない。

恐らくは、いや、『シーファ』の記憶からすると確実に、『異世界』の人間である私の精神が『シーファ』の中に入っているのだ。……というか、入れ替わったとも言うべきか。

まだ記憶が馴染まないためなのか、それとも別の理由があるのか知らないが、所々不明な部分はあるが、私は、起きる前に聞いた悲痛な『声』の主——シーファと精神を交換する形でこの世界に来たらしい。シーファが何故そんなことをしたのかは分からないが、どうすれば帰ることが出来るのかはわかっている——シーファの『記憶』が教えてくれる。

私はそのためにどう行動すべきかを数秒で判断し、口を開いた。

「……すまない。少し、ぼうつとしてしまったようだ」

「疲れてるのか？ 今日出発できるか？」

「ああ。……大丈夫だ」

頷いて、立ち上がる。基本的に着物みたいなつくりの服だけじゃなんだか心許なくて（だってこの服結構薄い）近くにかけてあった、これまたひらひらしてる上着を羽織った。

「準備は出来ている。だが少し待っていてくれ。私は起きたばかりなんだ」

「外出ておいたほうが良いか？」

「出来ればそうしてもらえると助かる」

「わかった」

言葉と共にレアルードが外に出て行く。それを見届けて、私は大きく溜息を吐いた。

「……どうしよう」

いや、どうするべきなのかというか、これからの行動指針に関しては分かっているんだけど。

この世界には『魔王』がいるらしい。

……ありえない、と思うけど、異世界だからとりあえず納得しておく。

それで、どうやら『シーファ』は魔王を退治しに行くパーティの一人だったようだ。そしてレアルードもその一人。ゲームとかで言うところの勇者がレアルード、初期メンバーの魔法使いがシーファ、みたいなポジションっぽい。

『魔王』を倒せば元の世界に帰れるのだと、『シーファ』の記憶が告げている。私とシーファの精神を交換する術は、『魔王』を倒すことで解除されるらしい。

『シーファ』の記憶によれば、今日が魔王を倒す旅に出る日で、それ故にレアルードが朝から尋ねてきたということなのかな。……

え、わざわざこの家に？

『シーファ』の記憶と照合して疑問が浮かぶ。だってこの家、レアルードとか他の人とかが住んでいる場所から結構離れた場所、もつと言え森の中にある。なのにこんな朝っぱらからわざわざ？

それはちよつとおかしくないか？

まあ、パーティがシーファとレアルードだけならまだ分かる。面倒見いい人だなーで済ませられる。でも『シーファ』の記憶から得た知識だと、出発時のメンバーは三人なのだ。

私と、^{シーファ}レアルードと、えーと……あれ、名前何だろう。『シーファ』の記憶は私にとって元々のものではないから、『思い出す』という工程になにか不具合でもあるのか、上手く記憶を検索できないのだ。

まあその内思い出せる（この表現が的確かどうかは置いて）だろうから、とりあえずそれはいいとして。

自分の身体を見下ろす。全てが見慣れない。視線の高さも違う。声も違う。身体のラインも――。

……あれ？

ぺた、と自分の胸に手を押し当てる。……平べったかった。

一度深呼吸してもう一度確かめる。……やっぱり平べったかった。

……え？

もしかして、『シーファ』って――。

即座に閃いた嫌な予感を振り切るように『シーファ』の記憶を辿る。

いやいやいや、百歩譲って身体の交換はいいけど、性転換だけは勘弁……！

ほぼ半泣きで記憶を探る。触って確かめるとか無理。嫌過ぎる。下半身を意識するのも同様の理由で却下だ。

そしてなんとか望んだ記憶を引っ張り出したわけだけど……。

「む、無性体……！？」

思わず床に膝と手をついてうなだれたい衝動に駆られた。やらないけど。

いや、男よりはいいけど……いいけど、無性体って……。

上もないけど下もないってことだね。……は、排泄器官とかどうなってるんだろう。日常に密接しすぎて意識しないと記憶（っていうか知識？）が出てこないんだけど。

……まあ、ここで私が何を思おうと事実は変わらないから、この辺のことはありのままに受け止めよう。男性体じゃなかったただけマシだ。

というかあんまり遅いとレアルードがまた突入してくるかもしれない。

シーファが用意しておいた（と記憶が告げている）荷物を手に取る。……異様に軽いんだけど。ちゃんと旅の用意できてるんだろう

か。

ちよつと不安になって中を見てみようかと思ったところで、外からレアルードが大声で呼びかけてきた。ああもう、もうちよつとくらいゆっくりさせてくれないかな……！ 一応私いきなりこの世界に連れて来られたばかりなんだけど！

そんなことレアルードが知るわけもないので、仕方なく扉に向かう。

あ、ちなみに荷物が異様に軽い理由はほぼ四次元ポケットだからだった。そういう『記憶』があつた。

でも、つい耳のない猫型ロボットを連想した私を誰も責められないと思う。……実際は魔法の恩恵らしいけど、四次元ポケットって言ったら、ねえ？

はじまりの日・2

とりあえず滞りなく魔王を倒す旅に出ることが出来た。

ちなみに思い出せなかった旅の仲間三人目はピアという名前の女の子だった。ウェーブのかかった栗色の髪と新緑のような瞳を持つ、可愛い、けどちょっと気が強い感じの女の子。なんだか私：シーフアに対して当たりがきついのが玉に瑕だ。

武器は弓。後方支援二人に前衛一人って言うのははたしてバランス的にどうなんだろうかと思わなくも無いけど、どうやらリアルードはかなり強いようなので大丈夫だろう。

よくあるRPGの王道っぽく、まずはちょっと離れた村だけ町だかを目指すらしい。そして今現在はその道行きの途中なのだけだ。

……………なんだろうこの空気の悪さ……………！

「リリスの町まではあと一時間くらいだ。このまま休まず行くつもりだけど、大丈夫か？ 朝も様子がおかしかったし……………」

心配だ、と言う感情を顔全体で表しながら、リアルードが話しかけてくる。それに当たり障りの無い言葉を返しながら、斜め後ろから感じるどう考えても好意的ではない視線について考える。

その視線の持ち主はもちろん私^{シーフア}ではないし、リアルードでもない。

ごく簡単な消去法で導き出される結論は、私に内心で首を傾げさせるには充分だ。

シーファの記憶の中に、ピアの情報は殆ど無い。それはつまるところ、ピアとシーファの関わりがあまりなかったことを示す。

シーファの記憶を探ってみても、彼女と会話したのは両の手で足りる程度の回数だった。シーファはあの森の中の家にほぼ引きこもっていたのだから。

そんなシーファにやたらと会いに来ていたのがレアルードで、どう考えても人好きがするとは言えないシーファに対しても嬉々として話しかけ、外に連れ出し、時には家に泊まり込み——そんなレアルードを、シーファは意外と気に入っていたようだ。故に邪険にすることも無く、それなりに仲も良かった、と記憶が告げている。

そしてここからは私の推測なのだけど、ピアはレアルードのことが好きなんじゃないかと思う。なんか私に向けられてる感情って嫉妬っぽいし。

なんで私に嫉妬^{シーファ}なんてするのは疑問だけど。

だってシーファは無性体だけど、どうやら対外的には男で通していらしいのだ。まあ、胸がない——貧乳とか言ってごまかすのも無理なくらい真っ平らなのだから、女と偽るより男と偽る方が簡単だったのだろう。

どうやらこの世界に無性の人型種族はいないようだし、そもそもシーファはエルフ（この世界においては伝説上の人型種族で、まあ概ねゲームとか漫画とかに出てくる『エルフ』のイメージで合ってるっぽい）であることも隠しているのだ。

とにかく人間外であることをひた隠しにしていたようなので、男であると思われたところで特に問題もないし、誤解を放置していた

のだろう。

ともかくもレアルードやらピアにとって『男』であるはずの私を、
何がどうして恋愛的な嫉妬対象として見る事が出来るのだろうか、
ピアは。

まさかレアルードが男色家であるわけもあるまいし。……え、な
い、よね？

ちよっぴり不安になりつつも、さらに考えをめぐらす。実際のところ、ピアが嫉妬を向けてくる理由が全く予想できないわけじゃない。しかし、恐らくは理由の大部分を占めるだろう問題は、私にはどうしようもない部類のものだ。

まあいいかと考えを打ち切る。ぎすぎすした雰囲気はちよつと、いやかなり精神に負担がかかるだろうし、視線が気になって仕方がないけど、そのうちどうにかなるだろう。別にシーファとレアルードは特別な関係というわけじゃないのだから。

もしかしたらレアルードとピアが恋人同士になるなんてことがないとも限らない。RPGのお約束的にも有り得そうだし。なんていったって初期パーティメンバー（仮）だ。

でもそうなる^{シーファ}と私が邪魔虫になるなあ。新しいパーティメンバー早く増えないだろうか。

そんなことを考えつつ、そして度々声をかけてくるレアルードに
適当な言葉を返しつつ、歩を進める。

っていうかレアルード、私に^{シーファ}はつか声かけてないでピアも気にかけてあげなよ！ 女の子なんだし！

……いや、こうもレアルードが心配してくる理由は分かっている。

私が転ぶからだ。

いや別に、私がドジっ子なわけじゃないよ！？

考えてみればすごく単純なことだけど、どうしようもない——恐らく『出来る限りのことをし』てくれたシーファにも、どうすることもできない問題があったただけのこと。

『私』と『シーファ』のリーチが違うのだ。というか全体的に違いすぎる。

『私』よりも長い手足、エルフだからなのかはわからないけれど鋭すぎる五感、すべてが強烈な違和感として私の感覚を混乱させる。普通に歩こうとすれば長さの違いでつんのめるし、耳が良すぎて音がごちゃごちゃして気持ち悪いし……挙げればキリがないほどの違和感のせいで、顔色悪いし声に力ないしふらふらしてるし時々転びかけるといふ、到底元氣そうには見えない、色々な意味で『様子のおかしい』シーファが出来上がってしまったわけだ。

だからリアルードは私が具合悪いんじゃないかとかなんか無理してるんじゃないかとか思っ、気にかけてくれているんだろう。多分。

だけどこればかりは慣れるしかない。理由言えないし、実践で慣れるのが手っ取り早いだろうし。

まあ、体調悪いんだという風に誤解してるみたいだから都合がいい。多少変な言動しても誤魔化されてくれそうだ。

……ああ、でも私を気にかけるくらいならピアを気にかけてあげ

てくれないかな本当。

善意なのはわかるけど、ただでさえ気を張ってないといけな
いに心配そうな目で絶え間なく見られるのはちよつと精神的にキツ
い……！

何の苦行だろうと言いたくなるような時間を経て、第一の目的地
だった『リリスの町』とやらに着いた。

『町』というだけあって、レアルード達が暮らしていた村よりも
大きいし、道も整備されている。石造りの建物と木造りの建物が混
在していて、やっぱりどこかファンタジーっぽい。

普段だったら絶対におのぼりさんの如くきよろきよろうろする
自信があるけど、今現在の体調と状況的にそうできなかったのは
良かったのか悪かったのか。

既に限界ギリギリだった私を見兼ねてか、ものすごく迅速にレア
ルドが宿をとってきてくれた。

ピアの視線が痛いけどものすごく有難いよレアルード……！ 今
ならハグで感謝を表したって良い。……いや、単にそろそろ歩くの
辛いだけです。寄りかかりたい。でもピアが怖いからやらないでお
く。

幽霊さながらな感じでふらふらと宿に向かう。よっぽど死にそう
な顔色だったのか、途中でレアルードが肩を貸してくれた。視線に
殺傷能力があったら十回くらい惨殺されてそうな視線をピアから受
けたけど、拒否できるほどの余裕はもうなかったので厚意に甘えさ

せてもらった。

っていうかありえないよこの頭痛と吐き気。鋭敏すぎる五感には早く慣れないとまずそうだ。正直ここまで影響が出るとは思わなかった。

辿り着いた宿の一室でベッドに寝転がる。なおも心配そうなレアルードと射殺しそうな視線を放つピアをなんとか言いくるめて部屋から追い出し、溜息を吐く。

目を閉じてすぐに、夢に落ちた。

目の前に鏡があつた。そこにはすぐく申し訳なさそうな顔をした『シーファ』が映っていて、彼は口を開いて何か言う。けどその言葉は聞こえなくて、私は首を傾げた。

しばらく何かを言い続けていたシーファは諦めたように首を振る。そしてシーファが空中に魔法陣みたいなのを書いて、それがふわりと私の方に移動してきて――。

ちょうど私の心臓の真上に触れたところで、目が覚めた。

「変な夢……」

呟いて、どのくらい眠っていたのだろうと窓の外を見る。町に着いたときはちょうどお昼時だったはずだから、多分一時間も経って

いないだろう。多分レアルードとピアはご飯でも食べてるだろうし、もう少しこうしてしよう。

……あ、でもこれ一応旅装なんだから着替えた方がいいのかな。なんか部屋着的なものくらい荷物の中にあるだろうし。

ベッドから降りて荷物を探る。難なく見つかった部屋着っぽいものに着替えようと袷を解いて、目に入ったものの異様さに凍りついた。

殆ど上半身全体に及ぶ、全体像を把握できない複雑な文様。そして心臓の真上に、それより小さな、夢で見たのと同じ魔法陣らしきものがあつた。

「なに、これ……」

指先で辿つてみてもそこにはただ肌の質感があるだけで、それがむしろ異様さを際立たせていた。

大きい方の文様——恐らくはこちらも魔法陣のような形状なのだろう——は黒色で、だけどうつすらと赤く発光していた。小さな魔法陣の方は淡く青色に光っている。

青色の魔法陣はしばらく鼓動に合わせるように明滅していたけど、じつと見ている間にすうつと身体に溶けるように消えた。同時に黒色の文様の発光もおさまる。

気付けば眠る前まで感じていた違和感の全てが跡形もなく消えていて、頭痛と吐き気も感じなくなっていた。

それが青色の魔法陣のおかげだということは何となく分かったの
で、とりあえず裕を元に戻す。そしてしばらく悩んだ後に、少し外
に出てみることにした。

まだレアルード達が帰ってくる様子はないし、一応書き置きでも
しておけばいいだろう。それに色々確かめたいこともある。

荷物の中にあつたメモ用紙っぽいものに少し出かけてくる旨を書
き綴り、部屋に備え付けらしいテーブルの上に載せて、荷物を持っ
て宿を出た。

ちなみに、この世界の文字は私が知っているどの言語とも違うも
のだった。とりあえず絶対に日本語ではない。だけど、誰かに伝え
る目的で文字を書こうとすると手が勝手にこの世界の言語に置き換
えて書いてくれるので、伝わらないということはないだろう。

『シーファ』が何かしてくれたんだと思うけど、自分の意思の外
で手が文字を綴るのは、ちょっと気味悪かった。便利だけど。

第一次接近遭遇

シーファの使う『魔法』は、『世界干涉力』によって発動する。

『世界干涉力』が一体何なのかは私にはさっぱりわからないのだけど、とりあえずその名の通りの代物であるらしい。

『世界』に対して『干涉』する力。例えば火種も道具も何もない状態で、灯りのための火をおこそうとしても無理だけど、その『無理』を『世界』を変化させることによって実現させる力、だと思う。灯りの例で言えば、そこに炎があるのだと『世界』に認識させることによって炎を生み出す、みたいな。

まあ、まだわからない部分が多い。『シーファ』の記憶だけでは心許ないので、実地でその辺は理解しようと思ったのだけど。

「えーと、とりあえず……『呪』と『魔法陣』があると、制御しやすいのかな」

確認するようにひとりごちて、極めて初歩的な『呪』と『魔法陣』を記憶から探る。

炎とか水とか氷とか風とか、RPGで見るような属性持ちの攻撃は一通りあるようだ。もちろん回復系統とか防御系統のものもある。

少し悩んでから、まずは攻撃魔法を試してみることにする。これから『魔王』を倒しに行くのだし、こういうものか知っておかない

とまずいだろう。

宿の裏手の空き地っぽいところにとりあえず来てみたのだけど、うっかり人に見られても困るので、『シーファ』の記憶にあった『結界』を張ってみようと決めた。近くに生えていた木の幹に荷物の中にあつた札らしきものを貼って、そこに『世界干渉力』を浸透させる。

途端、遠く聞こえていた喧騒や人の話し声がぷつりと途切れた。どうやら『結界』を張るのに成功したようだ。

よし、と気合を入れなおして、私は『シーファ』の記憶にある『魔法』を簡単なものから実践し始めた。

眼前に広がる巨大な氷の壁——否、氷の盾を消滅させて、私は溜息を吐いた。

「一体いくつあるんだろう、魔法……」

周囲に被害を及ぼさないように、宙に向かって攻撃を放つてみた。防御系の魔法を展開してそれに攻撃魔法を当ててみたり、身体補助系の魔法を自分にかけてからその効果を確かめてみたり……各系統ごとでも両手じゃ足りないくらいの魔法を試したはずなのに、『シーファ』の記憶からは次から次へと『魔法』が出てくる。

流石に広範囲系の魔法は怖いので試していないのだけど、『シーファ』はなんでこんなに多くの魔法を知ってるんだろう。

『魔法』ってそこまで一般的なものじゃないみたいだし、『魔法

全集』的な本があるわけでもない。

……自分で作ったとかだろうか。そういうことが出来るのかは知らないけど。

『シーファ』にとってこれらの魔法を知っていることは『当然』であるらしいので、まあ、理由を知らなくてもそこまで困ったことにはならないだろう。その内分かるときが来るかもしれないし。

あんまり長々とここで『魔法』について確認しているわけにもいかない。正確な時間はわからないけど、そろそろレアルード達が帰ってきてもおかしくない時間だろう。一応書き置きはしてきてるけど、なんかレアルードって心配性っぽい気がするからなあ。

とか何とか考えて、最後に回復系統の魔法を試してみようと『記憶』を探った。

回復系も他の魔法と同じで、範囲とか威力で段階が分かれている。……違うな、分かれているというよりも、その方が使うのに便利だからそうしてるっぽい。とりあえず使いやすいように区切りをつけておいてるみたいない……上手く言えないけど。

まあとにかく、威力も範囲も中程度の回復系魔法を『記憶』から引っ張り出して、私はそれを発動させるための魔法陣を宙に描いた。『記憶』の中の魔法陣を想起すれば、指先は独りでにその図形を生み出す。自分の意思の外で身体が動く現象には、多分もう慣れるしかないんだろう。

……やっぱり気味悪い、ていうか気持ち悪いけど。

別に魔法陣を描かなくてもいいんだけど、暫くは魔法陣と呪ありで魔法を使うことにしようと思ってる。まあ、そうする余裕があるときに限るだろうとは思っけど。

だって切羽詰つてるときにいちいち魔法陣とか描いてられない。
魔法陣を自分で描かずそのまま出現させることも出来るらしいから、
そっちもその内やってみよう。

ぼんやりそんなことを思ってる間に魔法陣を描き終わったので、
呪を紡ぐために小さく口を開いた。

『呪』は明確に決まってるわけではなく（まあそう言ったら『魔法陣』も絶対的な形状があるわけじゃないみたいだけど）、『私』がそれをその『魔法』が発動するためのキーみたいなものだとは認識していればそれでいいらしい。

『シーファ』の『呪』もちろんあつただけど、なんかちよつと……『私』が口にするのは難しいというか恥ずかしいというか、……いかにも『魔法使い』な『呪』だったのだ。

だから別に『呪』を決めることにしたのだけど、ある程度それっぽくて、且つあんまり恥ずかしくない『呪』というと結構限られてくるわけで。自分のセンスに絶望的な気分になるけど、これはもう仕方ないと思う。

「——『ヒール』」

呟けば、宙に浮いていた魔法陣が一瞬で光の粒子に変化し、ぱつと周囲に拡散した。次いで私を中心として地面に巨大な魔法陣が現れる。

大きさは空き地（？）より少し小さい程度だ。魔法陣の範囲が魔法の効果範囲だろうから、結構範囲が広い気がする。

……それにしても、果たしてこの視覚効果は何か意味があるんだ

ろうか。RPG的エフェクトにも程がある。最初から大きい魔法陣が展開すればいいと思うんだよね。せめて光の粒子っぽいエフェクトがなければ発動までの時間短縮にもなると思うんだけど。

そんなどうでもよさそうなことを考えていたからだろうか、回復系の魔法——便宜上『ヒール』と呼ぶことにする——が発動すると共に広がった光景に、私は即座に反応できなかった。

目の前に広がる大量の緑と、そこかしこに散らばる赤やら白やらピンクやら紫やら——色の洪水といっても過言ではないそれはどこからどう見ても。

「花……？」

それ以外の何物でもなかった。

さっきまでは踝ほどまでしかなかった雑草その他は膝辺りにまで伸びて、そこかしこで影も形も見当たらなかった花が咲いている。ぽつぽつ立ってた木にも青々とした葉が茂り、花だけじゃなく実までつけている始末だ。

明らかに、異常。

原因が何なのか——なんて、考えるまでもなく分かる。

……やってしまった……！

植物にも『ヒール』って効くんだ？！……あれ、でも『シーフ
ア』の記憶だとかこういう現象起こったことないみたいだったのに。
それ以前に『ヒール』って回復魔法じゃないの！？　なんで花が咲
くの！？

ええと、そうだ、とりあえずこれどうにかしないと。そのままに
してたら何の怪奇現象だって感じだし。ああでも抜いたり枯らした
りするわけにもいかないよね。

おろおろとしながら解決策を模索する。しかし良い案は思いつか
ない。

と、そのとき。

「わーあ絶景ー」

ぱちぱちぱち、と気の抜ける拍手と共に聞こえてきた声に、ぎく
りと肩を強張らせた。

声のした方を振り返れば、見知らぬ人間がこちらを見て笑みを浮
かべている。

「……誰だ」

「通りすがりの謎の剣士……いやいや冗談だからそう剣呑な目エしなさんな。お綺麗な顔が台無しよ？」

「誰だ」

「うつわー丸無視かい。……あーはいはいちゃんと答えますって。オレはタキ。旅人ってか剣士？」

いつそわざとらしくくらいに軽い口調と仕草。目に鮮やかな赤い髪と、内面を窺わせない金色の瞳。均整の取れた身体つきと隙のなさ、彼が佩いている剣が飾りではないことを示している。

警戒を強めて見つめれば、「おー、怖い怖い」と肩を竦めた。絶対おちよくってるよねこの人。

もしかして魔法使つてるとこ見られた？　っていうかなんでこの人結界内にいるわけ！？

結界の要である札に目を走らせる。……異常はない。結界に揺らぎもないし、きちんとその役目を果たしているようだ。

と、いうことは。

「……無効化か」

『シーファ』の記憶によると、特定の条件を満たすことで『魔法』を無効化できる人間が稀にいらしい。この男は恐らくそれなのだろう。

「い」名答へ。……ところで訊きたいことがあるんだけど」

こちらに向かつて歩きながら男が言う。だけど答える義理なんてないので無言を貫く。

それに気を悪くした様子もなく、男——えーと、タキさん？ ……
…もういいや、呼び捨てで。タキはさらに近づいてきたかと思うと、
唐突に手を伸ばしてきて。

「アンタさ、何隠してんの？」

『シーファ』の、さらさらとした長い銀髪を手にとって、息がかかるほどの近距離でにやりと笑う。

——…まずい！

よくわからない衝動に従って、無理矢理に距離をとる。少し髪をひっぱられる形になったので痛かったけど、優先すべきはタキから離れることだったから仕方ない。

「逃げられちゃった」

残念、と笑うその目は未だに獲物を狙う獣を髣髴とさせる。気は

抜けない。

今タキに近づかれるのはまずい。何故なのか、明確にはわからないけど。ただ、頭の中で絶えず警鐘が鳴っているのだ。

そして同時に湧き上がるのは、疑問。

（何故ここに、）

『私』じゃない。『シーファ』の、——記憶？

（タキに逢うのはもっと後のはずなのに——）

まるで映画のコマ送りみたいに、断片的な映像が脳裏に閃く。

『シーファ』とピアとリアルード。盗賊に荒らされる村と、連れ去られる女達。リアルードに縋り付く老婆。盗賊の根城。捕まったピアと、『シーファ』に下衆な視線を向けてくる男。悔しげに歯噛みするリアルード。地面に落とされた剣と、同時に発動した魔法。怒りに瞳をぎらぎらとさせながら『シーファ』の喉元に剣を向ける盗賊の首領。皮一枚分切り裂かれて流れた赤と、吹き飛ばされた首領の姿。剣を納めながら振り向いた赤髪と金瞳の——。

それは、『シーファ』にとっての、過ぎ去った『未来』。

あるはずのない、『記憶』だった。

第一次接近遭遇・2

現実のものでない映像が途切れる。それを見ていた時間は瞬きに等しいほど短かったはずなのに、とても長い時間に感じた。

視界の中でタキがこちらに再度手を伸ばしてきたのを見て、後退する。まだ視界が定まらない。夢の中にいるみたいにふわふわする。

頭の中に浮かんできた魔法陣を顕現させ、小さく呪を紡いだ。一時しのぎだけとやらないよりみだ。

伸ばされた手が静電気にでも触れたかのように弾かれる。タキが楽しげに笑みを深めた。

「へえ、やるじゃんアンタ。そこまでして隠そうとすること、気になるな」

『隠している』……そう、隠しているのだ。『シーファ』がほぼ恒久的に展開させている『魔法』——幻術によって隠されているのは、エルフの特徴。尖った耳を見られれば即座に人外であることがばれるから、『シーファ』はそれを隠した。

幻術は一度でも破られれば、同じものは効かなくなるらしい。今ここでタキに幻術を無効化されると、確実にエルフだとばれる。

『今ここで』ばれるのはまずい、と『記憶』が告げる。

なんなんだろうこれは。『シーファ』は思っていた以上に面倒くさい……じゃなかった、複雑な身の上だったらしい。

とにかく一旦タキから逃げればいいんだろうか。とはいえこの状況で何をどうすれば逃れられるんだろう。流石に人間に向かって強力な魔法を使うのは嫌なんだけど。そもそもタキは魔法無効化できるようだし。

これぞ袋小路？ 八方塞？ どうすればいいんだろう本当に。とりあえず結果を解除しよう。ここはいわば隔絶空間になってるから、そのままだと他の人の介入も期待できないし。

札に向かって物質を消滅させる魔法を放つ。作成者「シーファ」（私）の意思の元で放たれた攻撃だから、何の抵抗もなく届いた。ぱつと塵一つ残さず札が消え去る。

……この魔法、生物に向かって使えるとしたらものすごい凶悪だよね……。『記憶』からすると使えないこともないっぽいのが怖い。『シーファ』、使ったことあるのか……。

札が消滅すると同時に結界が解け、音が戻ってくる。鳥のさえずりとか人のざわめきとかそういうの。宿の食堂からだろう、食べ物匂いも漂ってきて、そういえばお腹すいてるなーと思った。

いや、それどころじゃないんだけどね？

結界がなくなったことにも頓着せず、タキは底の見えない笑顔でこっちを窺っているし。ちょっとでも隙を見せたら襲い掛かれそ

うだ。鷹とか豹とかそんな感じで。

方や笑顔、方や無表情で睨みあう。体感的には三十分位経った気がしたけど、せいぜい一分か二分くらいだろう。……精神力のポイント（ゲームのHPみたいなもの）とかあったらガリガリ削れてるよ絶対。

どうにもこうにも仕様がない膠着状態を打破したのは、意外な人物の登場だった。

「……っシーファ！」

声と共に唐突に白銀が閃いて、タキが後方に飛び退った。急いで駆けつけたんだろう、少し乱れた金髪。『シーファ』を庇うように立ったその手には抜き身の剣が握られている。

「レアルード……？」

なんでここに。

「ナイトのご登場、ってか？」

ふざけた調子でタキが言うと、レアルードの纏う空気が鋭さを増した。……ていうかこれは明らかに殺気放ってるよね！？　なんで

！？

まあ傍から見て『シーファ』とタキが仲良しこよしに見えなかったのは確かだろうけど、殺気まで放つことはないよね？ 牽制なら最初の一閃で充分だったはずだし。

そんなにタキが危険そうに見えたのかな……警戒はしてたものの生命の危機は全然感じなかったんだけど。

だって。

「レアルード、剣をしまえ」

どうしてだ、と言いたげな瞳をレアルードが向けてくる。それでもタキに対して警戒を怠らないのはすごいなあ。意外とレアルードって戦い慣れしてる？

「殺気を向けるような相手じゃない」

言ってから、なんかこれじゃタキが雑魚だつて言ってるようにも聞こえるよね、と気付いたけど、幸いにもタキもレアルードもちやんと私の言いたいことを汲み取ってくれたみたいで、怪訝そうな表情になった。

さて、どう説明すべきか。

『シーファ』の記憶から分かったのは、タキは後々仲間になる人材だってことだ。

二人に本気で戦われるのは困る。人間関係に響くかもだし。

何故なのかはまだ分からないが、『シーファ』はこの『旅』を一度どころか何度も繰り返し返しているらしい。『ループ』してるのだと言ってもいい。

だからこの『旅』の最中に起こることの『記憶』がある。だけど『私』が『シーファ』の身体に入ったことで本来の『シーファ』がしない行動をしてしまったために、『シーファ』の予期しない出来事——今ここでタキに出会うこと——が起こってしまった。

どこまで『シーファ』が辿るはずだった（あるいは辿った）道筋を外れていいのかがわからないので、洗いざらい喋ってしまうわけにもいかない。というかそんなことしたらただの頭のおかしい人だ。

とりあえずうやむやにしちゃえばいいか。

「どう見えたのかは知らないが、彼は私に危害を加えようとしたわけじゃない。触れられそうになったのに、私が過剰反応してしまっただけだ」

一応、事実だ。実際タキは私を傷つける意思はなかったはずだし。

「じゃあどうして結界なんて張ってたんだ」

「少し一人で考えたいことがあって、」

「だったら別に部屋の中でも良かったんじゃないのか」

「外の空気を吸いたい気分だったんだ」

なんか糾弾されてるような気がするんですが。雰囲気怖いよレアルード。

「なんで俺が戻るまで待たなかった？ この男がそうじゃないとしても、他の誰かに襲われる可能性だってあっただろう。お前は体調を崩していたんだし」

「だから出るのは宿の敷地内だけに留めていたんだ。……そういえばレアルード、ピアは」

レアルードと一緒に行動しているはずのピアの姿が見えないと思って問いかければ、レアルードは「そんなことはどうでもいい」と言い放った。

え、ちょ、それはないだろうレアルード。ピアは弓術が使えるとはいっても女の子なわけで。そしてこの町は比較的治安が良い方だとはいえ、素行の悪い人々もいるわけで。というか曲がりなりにもパーティーメンバーに対して『そんなこと』って……！

「いや、どうでも良くはないだろう。ピアはどこにいるんだ。宿の中か？」

それなら安心なんだけど、と希望的観測をもって訊いたのに、リアルードは表情すら変えずに「さあ」と言った。

「お前が魔法を使ったのを感じ取ってすぐここに向かったから……最後にいたのは雑貨屋だと思うが」

曖昧な言い方だ。きっと、殆どピアに意識を向けてなかったに違いない。……あんまりそう思いたくないけど、もしかしたら『シーファ』のことを心配していたからかもしれない。

多分、結界を解いたことで『魔法』の残滓を感じ取ったんだろう。リアルードは人の心の機微には鈍そうだけど、戦いに関することには鋭そうだ。

っていうか鈍いにも程があると思うんだ、リアルード。絶対ピアはリアルードと二人きりで喜んでただろうに。空気読もうよ。

「もしもし、お二人さん？」

不意にかかった声に、はっとする。ちょっと存在忘れかけてた。

「何だ。用がないのなら去れ。用があっても去れ」

先に言葉を返したのはリアルードだった。っていうか、あの、も

のすごい敵意を感じるんですが。用があっても去れってそんな。

「うわ、警戒心バリバリだなアンタ。……なあ、アンタ達旅人だろ？ 話し聞いている限り三人組の」

「……………」

レアルードは無言だ。さっさと消えろと言わんばかりの雰囲気だ。でもタキは全く気にする様子もなく言葉を続ける。

「一人は女だろ。で、その美人さんは魔法使い。アンタは剣士だな？」

にこにこ、というようにやにやと笑うタキ。一体何が言いたいんだろうか。

「オレは一応剣士なんだけど、——オレを仲間に加える気、ない？」

交渉↓説得

タキの提案を聞いた瞬間に踵を返して宿に戻ろうとしたリアルードを何とか説得して、話し合いの場を設けた、のはいいんだけど…。

宿の一階のレストラン——というか軽食屋と言つか、とりあえずアットホームな感じの食事処の片隅。周囲からは食事時の楽しげなざわめきが聞こえてきているけど、私達のいるテーブルには残念ながら和やかさはかけらも存在しない。

正面にはににこ、というようにやにやと笑うタキ。隣にはむつつりと押し黙って不機嫌さを隠そうともしないリアルード。

ぶっちゃけ超空気悪い……！

いやまあ、初対面の様子からしてこうなることはわかってたんだけど。

そこをどうにかして話す空気を持って行かなきゃいけないんだけど、とりあえずリアルードにそれを求めるのはなかなか無理難題そうなのがする。もう諦めちゃっていいかな。

「——タキ、だったか」

「うん？」

タキに話しかけた途端、横から視線が突き刺さる。痛い痛いそんな非難を込めた目で見ないで下さいリアルド。

なんでここまで敵対心（？）芽生えちゃったのかな。幾ら第一印象悪かったからってここまであからさまにはならないと思うんだけど。

そもそもリアルド、『シーファ』の記憶からすると好悪を率直に表に出すタイプじゃなかったっぽい、というか好悪自体そんなに強く抱かないタイプだったっぽいのに……。

それはともかく、さくさく話を進めることにする。できればタキの唐突発言の真意を探りたいところだけど、どうかなー。タキ、真意とか隠すの上手そう——っていうか『シーファ』の記憶からして間違いなく上手いし。何気に腹芸担当だったっぽい『記憶』が……。

「仲間に入れる気はないか、と先程言っていたが、何故いきなりそんなことを？」

切り出し方を考えるのも面倒になって、ストレートに尋ねてみる。タキはちよつと目を見開いて、それから楽しげに笑みを深めた。

「そりゃ、なんか面白そうだったから」

「……それだけか」

……うん、『記憶』にある通りのレアルードの動機そのままだ。
言われる場所が変わっただけで、何にも変わってない。

「ああ——」

何か思いついたみたいに金色の瞳が煌めく。……あ、デジャヴ。

「アンタに興味が湧いたから、ってのもあるぜ？」

みしべきばきつ、と不穏な音が隣からした。そつと視線を向けると、木製のテーブルがひび割れて一部粉碎された上陥没していた。ちょうど、レアルードが手を置いていた辺りだ。……素手で粉碎圧縮って、恐っ……！

視線を上げてレアルードの様子を窺えば、背筋が凍りそうな迫力のある無表情でタキを睨んでいた。なんかいろいろ臨界点突破したらしい。宥められる気が万が一にもしないんだけどどうしよう。

ひとまずタキの発言を放置するわけにもいかないなので、言葉を返しておく。

って言うっても、『シーファ』の『記憶』通りに返すしかないんだけど。

「……そうか」

リアクション薄いなあ、って自分で思わないでもないけど仕方ない。

実はこのやり取り、そのまま『シーファ』の『記憶』にあるんだよねえ。つまりこれは『シーファ』が繰り返した『旅』における不可避イベントなわけで。多分よっぽどアレな返答をしない限りは――タキは仲間になるのが確定している、と言ってもいいわけで。場所と状況が変わったからって、道筋が大きく変わるようなことはないんだろう、多分。

……まあ、ここまでタキとレアルードの間の雰囲気が険悪だったことは『シーファ』の記憶にもなかったけど。多少の警戒とか不審はあれど、今みたいにはば敵認定とかはさすがに。

どうしてこうなっちゃったかな……、いやわかってる。『私』がイレギュラーな動きしたからだよね。だから多少の苦労とか精神的ストレスは甘んじて受けるべきですよー……。

「――レアルード」

呼びかけると、纏っていた底冷えるような空気を霧散させたレアルードが、なんか犬が高速で尻尾振ってる幻覚が見える勢いでこっちを見た。

……『シーファ』、一体どういう風にレアルードに接してたんだろう。なんか刷り込みとかそれ系のレベルで懷かれてない？

「彼の申し出だが、私個人としては受けた方が後々のためになると思う。彼は当人の申告通り剣士のようだし、珍しい『魔法の無効化』の能力も持っているようだ。それに、今のままだと戦闘時の balan

スが悪いのは以前にも言っただろう。一時的にでも前衛が増えることは、これからのことを考えても良い方向に働くはずだ」

長々と（『シーファ』にしては）言い連ねたけど、これもまた『記憶』にある『シーファ』の言葉だ。ほぼ初対面で仲間に入れないかって聞いてくるのがタキの常だったので、毎回『シーファ』はこんなふうにはリアルードに提言していた。

……でもやっぱり、今回はリアルードの反応が悪い。いつもの——『シーファ』の記憶における——やりとりだと、この辺でタキのパーティ加入が決定するんだけど。

どことなく不満そうに唇を引き結ぶリアルードに、今度は『私』の意見を付け加えて言ってみる。

「リアルード。君の強さは知っているが、だからと言って、前衛の負担が君一人に集中する状態は良くない。彼は物言いこそ真剣味に欠けるし、軽薄そうな印象も拭えないが——」

「ちょい待て美人さん、それは酷えだろ」

「自分の言動を顧みてからそういう台詞は口に出した方がいいと思うが」

「……容赦ねえな」

茶々を入れてきたタキは、別に気を悪くしたとかではないらしい。浮かべた苦笑は表面だけのことらしく、成り行きを興味津々で見守っているのがありありと分かる。

放っておいても全然大丈夫そうなので、再びレアルードに向き直る。

「彼の剣士としての腕は、私よりも君の方がよく分かるはずだ。ならば、彼が加わることの有益性も分かると思う。何も、君だけでは不安というわけではない。ただ、この旅に更なる安全を求めるならば、彼の申し出は願ってもいいものだというだけだ。それに――」

言おうか言うまいかちょっと悩む。だけど、『私』だけじゃなく『シーファ』も思ってたことだったので、言ってしまうことにした。

「出来るだけ、皆が怪我をする可能性を減らしたい。君が傷つくのは、あまり見たいものじゃない」

言った瞬間、レアルードはきょとんとした。美形は多少の間抜け面すらカバーするのか、と感心してるうちに、みるみる赤くなっていく。……なんで？

前衛故にやたらめったら怪我をするレアルード（『旅』が進むごとに怪我の程度もレベルアップしていくんだよね、『記憶』によると。本当見たくない。いろんな意味で）だからこそその台詞だったんだけど……。

反応に納得いかないけど、何やら意見を受け入れてもらえそうな雰囲気なので、畳み掛ける。

「無理には言わないが、彼——タキを仲間に加えてみないか」

説得にはまず目線を合わせないと、と思ってじつと見てたのに、リアルードは何だか慌てたみたいに視線を逸らした。

そのまま微妙な沈黙が続くこと、数十秒の後。

「……………。……シーファが、そう言うなら」

頬を赤くして相変わらず視線を逸らしつつ、渋々って感じの態度を崩さずに言ったリアルードに、「どこのツンデレですかあなた」
と思ったのは致し方ないことだと思う。うん。

……………あと正直言って、わりとガタイの良い西洋風美形の赤面顔つて、色々微妙です。

合流

なんとか話纏まってよかったなあ、でもなんか忘れてるような、
とか思ってた、ら。

「やっと見つけたっ」

ちよつと非難がましい響きを含みながらも可愛さが溢れるような
声と、視界を過ぎつたふわふわとした栗色の髪。

私を押しつける勢いでレアルードに抱きついた……飛びついた？
彼女を見て、忘れてた何かを思い出した。っていうかタキが仲間
に入れないかとか言い出す前はそれについて話してたんだった。

そうだよレアルードがピアを放置してこっちに来てたんだ……！

「レアルード、いつの間にかいなくなっちゃってるんだもん。びつ
くりして探し回っちゃった」

ピアは座る私とレアルードの間に割り込むような形になってるの
で表情は見えないけど、こういう顔してるのか想像できる声音と台
詞だ。

とりあえず危ない目とかには遭わなかったみたいで良かった。私
のせいで（って言うてもいいよねこの場合。不本意だけど）そんな

ことになったらものすごく寝覚めが悪いし。

明らかにピアはレアルードしか見ていない、つまり二人の世界作ってるも同然なので、ひとまずそっちは意識から切り離す。デバガメの趣味はない。

正面のタキに視線を向ければ、何故か探るような目でじっと見られてた。凝視。穴が開くレベルで。

……あああそうだったそもそもタキって『シーファ』が隠してることを暴きたがってたんだっけ？！

多分これからはさっきみたいに実力行使に出ることはないと思うし、レアルードを防波堤代わりにすればどうにかこうにかそれなりに誤魔化せるらしいっていうのは『シーファ』の記憶からも分かるんだけど。

でもそうしちゃうと、現段階でもよろしくないピアとの関係が更にこじれそうだなあ……これまでの『シーファ』はその辺どうやって回避してたんだろう。なんかピア関連ってあんまり思い出せないんだよね。謎。

存在を忘れかけてた飲み物（なんか果実っぽい味）を飲みつつタキの視線を受け止める。

こう見るとタキって微妙に浮いた色彩してるなー。いやこの『世界』はそれはもう色とりどり、色彩豊かすぎるくらい髪の色も目の色もカラフルな人がたくさんいるみたいなんだけど。ピンクとか緑とか、地毛とは思えない——少なくとも『私』の居た世界で自然に出ないような色の人が。

「ただどその中でも、赤髪に金瞳っていうのは珍しいらしくて、『シーファ』の記憶の中でもその組み合わせの人はタキしかない。……なんか理由があつた気がするんだけど、何だったかな。」

そんなことを考えていたからだろうか。

傍から見たら見つめ合つてゐたいな形になつてたことに気付いたのは、タキとレアルードが顔を合わせてからの短い時間でお馴染みになった、不満を訴えるような自己主張の激しい視線を受けてからだった。

……この世界の人って目が口以上に物を言いすぎだと思います。

「……レアルード、話は終わったのか？」

無視する意味も理由もないので、こっちから声をかけてみる。レアルードは頷いた。

その横からこれまた強烈な視線を向けてくるピアは見なかったことにしておく。……たかだか一言口にしただけに理不尽だ。意識して聞いてなかったからどういふ会話が為されたのかは分からないけど、まあいいか。多分私には関係ない……よね？

「それならば、一度部屋に――」

言いかけて、そういえば、と気付く。我関せずな感じで頼杖をついてこっちを見ていたタキを振り返った。

「君を仲間に加えるということはひとまず決定したことになるが、聞きたいことが幾つかある。今はどこの宿に？」

「身上調査かなんか？ 別にいいけど。――宿はとってない。飯食いにここ来たところでアンタ見つけたから」

「そうか。私達はここに部屋をとっているから、話はそちらでするでしょう。それでいいだろうか」

「オレは別に構わないぜ？ この町で宿とるならここにしようと思つてたしな」

……ん？ 今の言い方だと、積極的に宿とるつもりはなかったみたいな感じだけど、タキにとってこの町って長居するつもりなかった場所なのかな。

そういえば『シーファ』の記憶だとタキって盗賊の根城に先に着いてたみたいだし、それっぽい。

「では、部屋に行くでしょう。……これからについても少し話したいが、先に彼と話すことになる。レアルードとピアはもう少しこちらに居ても構わないが」

レアルードはタキのことあんまり好きじゃないみたいだし、ピアにとっては見知らぬ人レベルだろうから（そういえばレアルード一応その辺話してくれたのかな。仲間云々のときにピアが驚いた顔はしてなかったから大丈夫だろうけど）、気を遣ったつもりの言葉だ

っただけだ。

「いや、俺も戻る」

予想外に強い口調で言われて、びっくりした。

……いや別に、そんなじーっと見てこなくても反対するつもりも却下するつもりもないんですが。あとピアが明らかに不満そうな顔してるけどいいのかレアルード。

「私に否やはないが——ピアはいいのか」

「ピア？」

……なんでそんな如何にも予想外のこと言われましたみたいな顔してるのかなレアルード。もうちょつと空気読んで！

あからさまにむくれているピアを振り仰いだレアルードは、首を傾げて言った。

「買い物に行きたいんだったら行ってくればいいだろう」

えええ！？　そこでどうしてそんな台詞が出て来ちゃうの？　ピアの態度のどこをどう読んだらそうなるの！？　っていうか1人で行かせる気満々だよこの人！

「……1人で買い物に行ってもつまらないでしょ」

わあすごい、位置的に見下ろす形になるのに上目使い（雰囲気的に）とかピア、テクニシャンだ。だけど相手がレアルードじゃねえ……。

「……？」

怪訝そうに首を捻るレアルード。通じてない、通じてないよ色々……！

なんかもう鈍いとかそういうレベルなのこれ、なレアルードに頭痛がしてきたので、放置して先に部屋に戻ることにする。良心的な何かがついたけど気にしない。だって付き合ってられないってこんなもの。

まあ意思疎通頑張ってください。それなりに近い部屋から応援します。多分。

レアルードとピアに声を掛けてから、タキと共に部屋に向かう。

——…ってちょっと待ってレアルード、会話ぶち切ってついてくるのは勘弁してください。これ以上ピアとの関係悪化させたくないんで！ 後生だから止めて……！！

確認

とりあえずなんとかレアルードにピアを放置して着いてくるのを諦めさせて、今度こそタキと共に部屋へ向かう。

そういえば気分的な意味で瀕死だった＋寝て起きて謎の魔法陣のおかげで回復してからすぐに外に出たせいで、どんな部屋かちゃんと把握してない。広さはそこそこあった気がするけど……。

考えつつ辿り着いた部屋に入って、タキに備え付けの椅子を勧める傍ら部屋を観察して――あれ、と思う。

……気のせいだろうか、この部屋二人部屋に見える。ベッドは同じサイズのものが二つ、椅子も二つ。旅の荷は部屋の隅に置いてあるけど、そもそもピアって荷物持ってたっけ……？

二部屋とったのか、それとも経費削減的な感じで二人部屋で三人泊まるのか。ピア女の子だし、前者？ でもレアルード、部屋に案内するときこのことしか言わなかった気が。

……考えてても仕方ないか。まずは目の前にあることを済ませよう。

「で、美人サンはオレにナニ聞こつての？」

多分デフォルトなんだろうニヤニヤ顔のタキの正面に座って、な

んか含みありそんな言い方は気にせずさっさと質問を済ませることにした。

「順番が多少前後してしまったが——そうだな。まず、君は何を目的に旅を？」

「別に何も。あえて言うなら腕試しか？」

「では、私達の目的地がどこであれ、目的が何であれ、ある程度は付き合ってもらえるということか」

「まあ、気が向く限りはな。アンタ達色々面白そーだし」

……うーん、『記憶』から予想してたけど、とっても自由人な返答だ。

飽きたらポイツとされそうな気がものすごくする。まあそれがタキなんだと『記憶』が告げてるけど。

だってタキが旅の終わりまで一緒に居たことって三回に一回くらいだよ。半分行かないうちにオサラバとかざらだったよ。ホント自由だな！

「君の都合が許す限りで構わない。最低でも大きな町に着くまでは道行きを共にしてくれればとは思うが」

せめてレアルード達が連携とかその辺をある程度こなせるようになるまでは離脱して欲しくないなあ、と思つての言葉だったんだけど

ど。

タキはそれを聞いて——すつごく意地悪そうな笑みを浮かべた。

「確約はできねえな。——アンタが見返りくれるってんなら話は別だけど？」

「見返り、とは？」

「アンタの『隠し事』の内容——とか」

「何の事だか」

予想内の要求に、しらを切る。『シーファ』は顔に表情が出にく
い（っていうかデフォルトが無表情）タイプでよかった。何言っ
てもやってもフラットで真意が読めない感じだし。そこは中身が『私』
でも変わらないはず。

「まあ、ンな簡単に教えてもらえるとは思ってないけどな。——そ
れに、」

意味ありげに言葉を切ったタキは、獲物を狙う捕食者の目で、私^{シーファ}
を射抜く。

「——自分の手で暴く方が、楽しみがあるってもんだよね？」

……うわあ歪んでる。いや歪んではないか。ある意味自分の欲求に素直なだけで。

とりあえずサドっ気溢れる（こういうのサドでいいのかな）発言はスルーして、本題に戻る。

『シーファ』、スルースキル高かったみたいだけど、天然なのか何かで鍛えられたのか。なんか達観と言うか浮世離れしてる言うか、そんな性格だったみたいだし、どっちもってところなのかな。

「先程君は剣士だと自称していたが――」

「それが？」

「本当にそれだけか？」

「そりやどついう意味だ？　嘘を言っ たつもりはないぜ？」

うん、私だつて嘘だと思ったわけじゃない。『シーファ』の記憶を見る限り、確かにタキは剣士だ。『ただの』剣士じゃないだけで。

「全ての手札を明かせとは言わない。それはこちらが手の内を晒していない以上、理不尽な要求にしかないからだ。だが、ある程度はこちらを信用してもらわなければ、道中に支障が出ることもある」

「――随分、明け透けに言うな？」

「それが私の誠意だ」

暗に「隠し事ありますよ」って言ったも同然だけど、まあこれくらいは仕方ない。『シーファ』も似たような問答（？）してたし。何かを見極めるように私の目をじっと見てたタキは、暫くして軽い溜息を吐いた。

「——しゃーねえな。こつちも多少は『誠意』見せろってことか」

「強要はしない。出会ったばかりの人間に信を置けなどと無理難題を言っていることは分かっている」

タキがこつちに興味を持つてることを逆手にとって言ったわけだから、興味より面倒さが勝れば離れていくことも視野に入れているし、何より——『記憶』というアドバンテージがあつての台詞なのもある。

……なんか騙してるみたいで気分悪いなあ。分かつてて言つてる、つていうのが。

「……それさ、分かつててやってんのか？」

一瞬、心を読まれたのかと思った。だけど、何だかニュアンスが違う。どういう意味だろう。

「それ、とは？」

「分かんないならいい。——で、さっきの続きだけど」

なんか謎を放置されたけど、どうやら話してくれるらしい。どこまでかは分からないけど。

仕方ない、といった表情で、タキは続ける。

「俺は剣士だ。それは間違いない。ちょっと変わってる自覚はあるけどな。……アンタもさっき見た『無効化』と——」

言いながら、タキは腰の剣に手をやる。同時に早口で何かを呟きながら空いた左手が宙をなぞる。

「『双剣使い』っつー、そこそこ珍しい特徴持ちだ」

気付けばタキの左手には、腰に提げていた——今は右手に握られている剣と色違いの剣があった。

そしてその双剣は、交差して私の首元シーファにあてられている。

いつの間に、と内心驚くものの、顔には出ない。これもしかして頸動脈に当たってる？　とも思っけどやっぱり表情は変わらない。

それは『シーファ』の鉄壁ともいえる無表情があるからでもある

けど、一番の理由は――。

「もうちょっと、取り乱したりするかと思ったんだけどなー」

笑いながら剣を引くタキから、殺気が感じられなかったこと、だろっ。

殺気なんて『私』はわからないけど、『シーファ』の経験と記憶が状況を認識するより先に『無害』だと教えてくれた。

それでもやっぱり驚いたり怖いと思ったりはしたはずだけど（曖昧になるのは自覚する前に剣が引かれたからだろう）、そこは『シーファ』の無表情に助けられた感じだ。

「……殺気が無かったからな」

「美人サン、結構戦い慣れしてる？ アンタらどっちかっていうと初心者っぽいと思ってたんだけど」

「初心者ではあるが、経験は皆無ではないというだけだ」

これ、嘘じゃないけど嘘になるのかな？ この『シーファ』は旅に出たことも修羅場を潜り抜けたこともないけど、何度も繰り返した旅の『記憶』があるから、殺気とかに敏感なんだよね。

……うーん、微妙なライン？ ただでさえ先に得てる情報量が違うから、できるだけタキに嘘つきたくはないんだけど。難しい。

「成程……って、そっぴゃ美人サン、名前は？」

……。あ。

「——すまない。礼を欠いた。シーファ・イザンという」

「まあ良いつて。シーファ・イザン……シーファな。了解」

すっかり名乗るの忘れてた……いやあの状況で呑気に自己紹介は無理だったけど。

っていうかタキが名乗った時ピアいなかったし、改めて自己紹介してもらうべき？ とりあえずリアルードがピアに伝えてくれてるといいんだけど。

気を取り直して。

「そういえば、君は何も聞かずに仲間に入れないかと言ってきたが、一応話しておくべきだろうことがある」

「何？」

「普通、まずこれを訊くものではないかと思うが——私達の旅の目的についてだ」

言えば、タキは「ああそついや忘れてた」とか呑気に言った。いやいや、普通忘れないから。

「私達の旅の目的は、ひとつ。『魔王』を倒すことだ」

「魔王——つてあの？」

「君が何を指して『あの』と言ったかは私には分からないが、恐らくは君が思い浮かべているもので間違いないだろう」

「そりゃまた壮大な目的だな」

壮大……言われてみれば確かに。

——つていうか、そういえば、そもそもどうしてこのメンバーで魔王を倒しに行くことになったんだっけ？ 『シーファ』の記憶の中でこの流れが当然だったから特に疑問も持たずに一緒に旅に出ちゃったけど。

ええっと、あと少しで思い出せそうんだけど何だったかな。

高速で『記憶』を辿る。『私』の全く関わらない、旅に出る前の『シーファ』の記憶を。

レアルードに旅に必要な荷を教える——違う。

旅立つ仲間にピアが加わることをレアルードから聞く——違う。

一緒に旅に出ないかとレアルードに誘われる——違う。

人々の期待にプレッシャーを感じたレアルードを宥める——近い。魔王の出現、伝承、運命——これだ。

辿り着いた記憶を更に詳しく思い出そうとしたところで――慌ただしげな足音と、乱暴に開かれた戸の音に、回想が断ち切られた。

道筋

「レアルード——それにピアも」

戸を壊す勢いで開けたのはレアルード。遅れてその後ろにピアが現れた。

……えーと、なんで二人とも不機嫌そうなのかな？

部屋に入ってきたレアルードが無言で近付いてくる。妙な威圧感を発してるけど本当に何がどうしたの……！？

シーファ
私の後ろに回って威嚇するようにタキを睨むレアルードに困惑する。あと前方から悔しげな面持ちでこっちを見てるピアにも。

一体どういう流れでこんなことに……謎だ。

まあ何も言わないってことはそう重要なことじゃないのかもしれない。

せつかく二人も来たし、タキに確認したかったこととか言っておきたかったことはあらかた話し終わってたし、これからの話をしちゃうていいだろうか。なんかそういう雰囲気じゃないっぽいけど、かといってこのままぼけっとしてるのもアレだし。

「ちょうど良かった。今、旅の目的についてタキに説明していたところだが——」

言いつつ立ち上がる。他に椅子がないから全員座ることはできないし、そんな中平然と座り続けるなんて芸当もできない。だって落ち着かないし居心地悪いよ絶対。

どうぞお座りください、的な感じにレアルードの方に椅子を動かしたけど、相変わらずタキを睨んで気づいてくれない。

どうしようか考えてたらタキも立ったので、もうそのまま話に入ることにした。

思い浮かべた魔法陣を指先で宙になぞりつつ、短い呪を口にする。そして現れるのは、この周辺の地図。通ったところ以外は簡易もいいところで、おおその方角を見るくらいにしか役に立ちそうにない——まあRPGではわりとお馴染みな感じの代物だ。

これまたお約束的に、自動マップピングシステム搭載だったりする。つまりこれから新たに行くところは、訪れた順に詳しい地図へ更新されるらしい。

どこまでもRPG風なことになんだかちょっと微妙な気分になるけど、まあ便利は便利だ。

地図を出したことで全員の注目が集まったので、机の上に地図を広げて本題に入る。

「私達が今居る……リリスの町はここだ。そして魔王が居ると言われているのはこの辺りになる」

言いながら、ちょうどリリスの町から正反対の場所にある広大な

空白の部分を指し示す。

地図上で見るだけでうんざりするような距離と種々様々な天然の防壁は見ないことにした。まともに考えると心折れそう。

「ひとまずは、このまま次の町に行こうかと思うんだが――」

「あ、ちよつと待ったシーファ」

「……何か問題があったか？」

遮ったのはタキだった。地図を覗き込んだタキは、行こうとしていた町とリリースの町のちょうど中間くらいの地点を指先でトントんと叩く。

「この辺にひとつ村があるらしいんだよ。俺、そこに届け物する依頼受けててさ。直接向かうよりちよつと遠回りになるけど、寄ってもらえるか？ 品渡すだけの仕事だから時間はとらないし」

そのタキの言葉にまたレアルードの機嫌が微妙に降下した気配がしたけど、それよりも問題は。

「やっぱり変わらないのか……」

「ん？ なんか言ったか？」

「……いや。大きく道から逸れているわけではないんだな？」

「ああ、そのはずだけど。ただ、あえて立ち寄るには離れてるし、商売とかするにも村の規模が小さいから、あんまり行商人とかが寄りつかないんだと。だからわざわざ依頼がきたってわけ」

この辺りでは、届け物といえば信頼のおける行商人……商隊などに頼むのが主流だ。その巡行ルートにかからない場所となると、届ける手段が限られてしまう。

だからこそ、タキのような流れの剣士に依頼が来たんだろうわけ——。

「——お前は『証』持ちの旅人なのか」

少し驚いたようなリアルードの言葉に、ハツとした。

『証』というのは、俗に『教会』と呼ばれる組織に認定を受けた者が持つ、ある種の身分と資格の証明みたいなものだ。『教会』の本義は別にあるけれど、ゲームとかでいうギルドのような役割も果たしているので、そこを通して今回のような依頼を受けたり出したりもできる。

『シーファ』にとってタキが『証』持ちなのも『教会』に繋がりがあがあるのも当然だったから全く疑問に思わず流しちゃったけど、今のつつこむなり驚くなりするところだったよ……！

何故なら『証』持ちはそれなりに希少だからだ。『教会』に依頼を出すのも依頼を受けるのも基本的には誰でも可能なんだけど、それは一定区域内——つまりひとつの『教会』支部（みたいなもの）

の管轄内で済むもののみらしい。

リリスの町にある『教会』の管轄区域はリリスの町の中だけ。つまりタキの言った村は管轄外に関わらず、タキはその依頼を受けてるってことになる。それはタキが『証』持ちだという事実を示すわけ。

見れば、レアルードもピアも少なからず驚いた顔をしていた。……え、私？^{シーファ} もちろん相変わらずの無表情ですが。

あれだよ、『シーファ』がこれまで表情筋使わなさすぎたから感情が顔に出にくいんだよ絶対。

「まあ、一応そうだけど。確かめるか？」

「……別にいい」

途端に嫌そうな顔になったレアルードに内心苦笑する。というのも、『証』は身体はどこかに刻まれるものだからだ。

パツと見てわかる場所がないなら、どこかしらを露出してもらわないとならないかもしれない——それを想像してレアルードは嫌がったんだと思うと、ちよつと笑えた。

「……話を戻すが、大して距離も変わらないだろうし、私は君の言う村に行くことに異論はない。レアルードとピアはどう思う？」

「シーファがいいなら、俺は構わない」

「……レアルードがいいならいいけど」

なんか似たような返答をした二人（とはいえある意味全然違うことを言ってるわけだけど）に微妙な気持ちになりつつ、「……だ、そうだ」とタキに向き直れば、にっこりと――胡散臭いくらいの満面の笑みでお礼を言われた。

……裏しか感じられないっていうのもある意味すごいよ、タキ。そしてレアルード、一応今のはみんなにお礼言っただけなんだから、ブリザード発生させるの止めてください。

未だ広げたままの地図に目を落とす。タキが示した村がある辺りを指でなぞって、気付かれないように溜息を吐いた。

さっきここから次の町にそのまま向かうことを提案したのは、『魔王』が居るといふ場所に向かうのに効率的だからだけじゃなくて、確かめたいことがあったからだった。

何度も『シーファ』が繰り返した旅の中、絶対に辿る道筋がある。その一つが、リリスの町から次の町の間にある、小さな村――盗賊に荒らされる村、だった。

そこで出会うはずのタキとリリスの町で出会ったから、もしかしたら、と思ったけれど、結局はその村に立ち寄ることになってしまった。

変わらない。変えられない。それが『運命』だともいうように。

だとしたら——その『運命』は、誰が決めたものだっていうんだろつ。

……その答えを、多分『シーファ』は知っている。だけど、『私の『知識』には、ない。それはきっと、『シーファ』が答えを隠したから。

ただ、時が来ればわかる、とだけ『知識』が告げる。

……本当、『シーファ』はなかなか面倒で厄介で複雑な身の上らしい。『運命』とかもう一般市民の手に負えないんですが。

まあ、ひとまずは『旅』を進めていくのかなさそうだね……人間関係もちよつとアレな感じなのに大丈夫なのか不安だけど、仕方ない。

やれることをやるしかないか、と開き直って、顔を上げた。

……とりあえずは、シーファとタキの睨み合い（睨んでるのはレアルードただけだ）を止めさせるべきだね、うん。本気で先が思いやられる……。

夢

その後のことは、まあ詳細には語らない。

軽く町を散策してちよつと買い物して食事なんかをしてから各自就寝した、とだけ。

ちなみに部屋割りシーファは私とタキとレアルード（とつてた二人部屋に一人プラスする形で落ち着いた。追加料金は発生したけど新たに部屋を取るよりは安いらしい。まあベッドとか足りないしね）、そしてピアが1人部屋、ということになった。

元々ピアは自分で部屋をとっていたらしい。まとめてレアルードがとつちやえばよかったのに、と思っただけど、何か理由があるのかな？

レアルードとタキが同席するとどうしてもギスギスする空気は、もう仕方ないと割り切ることに決めた。どうせ『シーファ』の記憶でも、タキ参入後しばらくはぎこちない空気だったし。

それにしても、レアルードは妙に『シーファ』に過保護と言うか、意識を傾けすぎると言うか……そんな感じなんだけど、理由がよく分からない。タキに対して隔意があるっぽいのも、多分それが関係していることじゃないのかと思うんだけど。

もしかしたらまだ思い出してない『記憶』にそのヒントがあるのかもかもしれないけど、ちよつとした知識を思い出すだけならともかく、『シーファ』の体験した出来事そのものを『思い出す』のは結構な負担になるみたいだから（一気に追体験するみたいな形になるからだと思う。タキのことを思い出した時が良い例だ）、しばらくは理由不明のままでいいかもしれない。

……それにしても。

「——この不思議空間って、何？ 夢……なの？」

真っ暗な、自分の姿も確認できないような空間で呟く。

思わず独り言を言ってしまうくらいには動揺してるんだな、と頭のどこかで冷静な自分が判断する。でもどっちかっていうとパニック気味だ。

状況とか、覚えてる限りの最後の記憶とかを考えるに夢なんだろうけど、ここまで意識が鮮明な状態の夢は多分初めてだ。明晰夢ってやつだろうか。

……って、あれ。今、言おうと思ったそのままの言葉が声になったよね？

「気のせい？ それとも、夢だから？」

今度はあえて思ったことを口にしてみる。やっぱりそのまま言葉になった。

そんなの当たり前のはずなんだけど、それが『当たり前』じゃないのに慣れつつあったから驚いてしまった。誰かに伝えようとしながらだと手が勝手に翻訳した文章を書くのと同じ原理なんだと思うけど、言葉を発するときには勝手に『シーファ』の口調になっていたのだ。

『シーファ』は妙にお堅い口調だけど、あの外見と声で（見た目

もさることながら、『シーファ』は声もよかつたりする（私の口調だと違和感ありまくりだから良かったのかもしれない）。

「で、結局ここがどこかはわからないわけだけど——」

ぐるりと辺りを見回した……つもりだったけど、真っ暗なうえ自分の身体さえ見えないし、正直感覚もあやふやだったりする。とりあえず見回せたかどうかも不安になるくらいに何も見えない。闇なんだか何なんだかわからないものしか見えない、というか見えてるのかもわからないレベル。

っていうか今更気づいたけど、これ『私』の声だ。

『シーファ』の声じゃなくて、『私』の声。ということは、今の私って『私』自身の姿なんだろうか。見えないけど。あ、触ればわかるかも。

そう思っで、実行に移そうとしたところで——。

【伝　　て　　る　　ら　　う　　か】

途切れ途切れの声が耳に届く。同時に、虫食いのような文字が脳裏に閃いた。

錯覚かと思っただけど、もう一度聞こえた——そして見えた文字に、そうじゃないと確信する。

【——伝わって、いるだろうか】

「え、えーと……？」

錯覚じゃないのはわかってても、理解がまだ追いつかない。正直ちよつとしたホラーに近い現象だと思うし。

でも、その『声』に聞き覚えがある気がして——そして気付く。

「シーファ……？」

【ああ、そうだ。……伝わっているのなら、良かった】

どこかまだ遠い声と、掠れたような銀色の文字。今にも消えてしまいかねないような、そんな印象を受ける。

【まだ安定していないから、そう長くは会話をすることができない。すまない】

続けて伝えられた言葉に、その印象が間違っていないかったことを知る。

シーファの言い方は、これから先安定することもある、安定すれば長く会話することができると感じる感じだったけど、何だか不安になる。本当に消えてしまうと思ったわけじゃないのに、何でなのかは自分でもわからなかった。

【恐らく君は私に聞きたいことも言いたいことも沢山あるだろうと思うが、】

【時間がない。だから、忠告を少しだけ】

申し訳なさと焦りとが滲む声に、気にしないでいいと口にすれば、ほっとしたような気配が伝わってきた。

……そういえば、この空間の中にシーファは居るんだろうか。声はどこから聞こえてるのかもよく分からないし、頭に浮かぶ文字は判断の手助けにならない。

まあ、今は特に重要じゃないから気にしなくてもいいか。

【私の辿った道筋は、あくまで目安程度に考えておいた方がいい】

【必ず辿る道筋もあれば、一度や二度しか辿らなかった道筋もある】

【君は君の思うまま、進んで行ってほしい】

「気にしすぎるのは駄目だってこと？」

【それもまた、君の選択だ】

【全く同じ道筋を辿れたことは、私にもない】

【君が君であるという事実によって、君は私と同じ道筋を辿れないだろう】

【……ただ、危険を避ける参考にはなるはずだ】

【巻き込んだ私が言うことではないが、極力君に危険な目には遭ってほしくない】

私が『私』だから、『シーファ』と同じ道筋を辿れない。それはすごく納得のいくことだった。タキとあの場所出会ったことだっ

て、その一環なんだろう。

……危険については、あまり考えないようにしていたことだったから、ちよつと気持ちしが沈む。

シーファの『記憶』では、シーファ自身が死にかけるような目に遭ったことはないみたいだったけど、私から見れば大怪我程度は普通になっていた。エルフだからなのか何なのか、尋常じゃない回復力が備わってるから大事にはならなかったみたいだけど。だからって痛みまで軽減されるわけじゃないし、私はマゾじゃないので痛かったり苦しかったりは極力お断りしたい。

【それと、魔法についてだが】

【私が『魔法』と定義づけしている程度のものならば問題はないが――】

【の枠を える な『世界 』を うの 、 だ】

本当に、唐突に。

最初に聞こえた時のように、途切れ途切れの言葉と虫食いのような文字だけを残して。

不思議な真つ暗な空間も、シーファの気配も、何もかもが消えてしまった。

「――え？」

思わず漏れた間抜けた『声』が、『シーファ』のものになってい

るのに驚く。

さら、と視界の隅を流れたのは、見慣れてきた銀色の髪だった。

……どういうこと？ 単に、『会話』が続けられなくなっただけ？
首を傾げつつ、現状を把握する手がかかりがないか周囲を見てみようと顔を上げる。と。

【はやく】

嫌になるほど鮮明に聞こえた……見えた言葉に息を呑む。
シーファの言葉を表す文字が清廉な銀色なら、今見えた文字は淀んだ赤色。見るだけで不吉さに総毛だつような——濁った血の色だった。

【はやく ここまで おいで】

伝わってくる感情は、どこまでも愉悦に塗れていて。
まるで無邪気で残酷な子どもが、お気に入りの玩具で遊ぶのを心待ちにするような。
そんな、声だった。

【おいで 『シーファ・イザン』】

そして、私の名前が呼ばれた瞬間、それは始まった。

頭の中を、血の色の文字が、無秩序に、ぐちゃぐちゃに、掻き回す、ように、踊って、踊り狂って、侵食して、めちゃくちゃに、すべてを、壊して、蹂躪する、ように。

壊れる、壊れてしまう。壊されて、しまう。

わけがわからないまま、恐怖とそれを上回る何かに、叫び出しそうになったとき——必死な誰かの声が聞こえた、気がした。

そしてまた、全てが遠く消えていった。

ああ、目が覚めるんだと——助かったんだと、そう思った。

夜話

「シーファ！」

開けた視界の中、最初に認識したのは月光に煌めく金色だった。
回らない頭とやけに重い身体を意識しながらなんだろうと思って、
気遣うような碧眼と視線ががち合って気付く。

……ああ、レアルードだ。

「よかった、目が覚めたか。随分魔されてたけど——また例の夢か？」

……『例の夢』？ なんのことだろう。

疑問に思っけど『記憶』は想起されない。ただ、こういうふうに
レアルードに起こされるのが初めてではないということだけが分か
った。

身体を起こしながら考えたけど何て答えるべきか分からなくて、
曖昧に首を振る。それをどう解釈したのかは分からないけど、レア
ルードはほっと息を吐いた。

「……すまない。私のせいで起こしてしまったか」

言つと、「違う」と即答された。どこことなく必死な否定に不思議に思つけど、理由を訊くことはできなかった。

コンコン、と小さなノックの音と共にタキが部屋に入ってきて、リアルードがベッドから離れてしまったから。

シーファ
私とリアルードを交互に見たタキは、ちょっと肩を竦めてからこっちに近付いてきた。

「目、覚めたのか。……とりあえず、ほら」

差し出されたカップを反射的に受け取る。鎮静作用のあるお茶が何かなのか、気持ちが落ち着くような香りがした。

「それでも飲んでちよつと落ち着けよ。アンタ、今にも死にそーな顔してんぜ？」

それはおおげさじゃ、と思ったけど、やけに真剣な顔でリアルードが頷いてるのが見えたからおとなしくお茶（飯）を口に運ぶ。やつぱりハーブティみたいな味がした。

あの『夢』——そう呼んでいいかもわからないような、禍々しい『誰か』の『声』から抜け出せたのは、多分リアルードのおかげ、なんだろう。覚める間際に聞こえた声は、リアルードのものによく似ていた。

『シーファ』のものはともかく、あの血の色の言葉の主は誰だっ

たのか——何だったのかが気にかかる。思い出すと嫌悪感なのか恐怖なのかよく分からないものがこみあげてきて、振り切るようにぎゅっと目を閉じる。血色の文字の残像が、まだ瞼の裏や頭の中に残っている気がした。

気分を変えようと、少し離れたところに移動したレアルードとタキを見れば、何やら小声で会話してるみたいだった。内緒話だろうか。

もしそうならあまり見ない方がいいのかもしれないと思って、窓の外へと視線の向きを変える。眠る前よりも中天に近付いた月が夜空を照らしていた。寝ていたのはそこまで長い時間じゃなかったみたいだけど、ぐっすり眠っているべき時間なのには変わりない。

レアルードは否定したけど、やっぱり起こしてしまったんじゃないだろうか。二人の話が終わったら、その辺りを改めて訊こうかな。

やることもないので、少しずつお茶を飲みながら『シーファ』の言ったことを反芻してみる。

最後の方は聞こえなかったけど、聞こえた分だけでも結構重要なことを言われていた気がする。

私は『シーファ』の記憶全てを見たわけじゃないし、そんなことしたらなんかヤバそうなのだけは分かるからやるつもりはないけど、ある程度は思い出したい——というか、把握したいと思ってる。シーファが言ったように、危険を避ける指標にはなるだろうし、ある程度の『道筋』は知っておいた方がいいと思うから。

タキとかレアルードに関係する出来事とかは断片的に分かるんだけど、例えば何度も戦ったはずの『魔王』についてとか、これから

先のパーティーメンバーについて（仲間になりうる人が他にもいることだけは分かってる）とか、知っておきたいのに思い出せてないことはたくさんある。

——…それに。

『意図的に』思い出せないようにされている『記憶』もいくつかあるみたいだってことは、何となくだけど感覚で分かっていた。『運命』を決めた『誰か』のこのように、『シーファ』が隠した『記憶』——『知識』が。

理由があつてのことだろうっていうのは簡単に予測がつくから、またあの不思議空間で会話できたとしても、『シーファ』に直接聞くつもりはないけど。

なんてことをぼんやり考えていたら、無意識にお茶を飲み干してしまっていたらしい。傾けたカップから馴染み始めていた味が流れ込んでこなかった。

ちょっと間抜けだな、とか内心苦笑しつつ顔を上げたら、いつの間にか話が終わったらしいタキとリアルードがこちらを見ていた。どっちもどことなく気遣わしげなのが少し居心地悪い。

タキ曰くの「死にそーな顔」も大分回復したんじゃないかと思つてたけど、そうでもないのかもしれない。

「——話は、終わったのか」

「……あ、ああ」

「飲み終わったんなら横になれば？ どうせまだ起きる時間じゃないしな」

「いや。目が冴えてしまった。しばらくは起きている。……先程リアルードにも言ったが、私のせいで起こしてしまったのならすまない」

^{シーファ}私の言葉を、リアルードが口を開くのより一瞬早く、タキが軽い口調と仕草で否定した。

「いや？ 俺もリアルードも、元々起きてたからアンタが謝ることじゃねえよ」

「……起きていた？ だが、二人とも私より先に眠ったのでは――」

二人が寝静まった後に私は就寝したはずだ。^{シーファ}『私』はともかく、『シーファ』の知識と経験からして気配を読み違えるはずはないのに、こういうことだろう。

その疑問には、リアルードが答えてくれた。

「……一度、お前を抜きで話したほうがいいと思って、夜中に下の食堂で会う約束をしていたんだ」

「オレとしてもずっとあんな調子でやりとりすんのはゴメンだったからな。了解したワケ。――途中で血相変えて部屋に戻るからナニゴトかと思ったけど」

「それは……」

レアルードが口ごもる。ちらりと私を見て、そのまま黙ってしまった。
シーファ

……なんだろう。気になる。

でも聞いてほしくなさそうなレアルードの様子に躊躇ってたらずういや、とタキが声を上げた。

「汗とかかいたんだったら着替えといた方がいいんじゃないの？
着替えくらいあるだろ？」

「——ああ、そうか。そうだった、な」

確かに少しべたべたする、気がする。とはいえ、『人間』に比べたらエルフはあんまり汗とかかかないみたいだけど。

そんな『シーファ』の身体でこれなら、人間の身体だったら汗びっしょりになってたに違いない。

だけど、せっかく気遣って（？）くれたんだし、着替えようかと立ち上がって——くらり、と視界が傾いだ。
シーファ

……あ、違う。単純に私が倒れたのか。

うまく身体に力が入らない。なのになんで完全に倒れてないんだろっ、と思っで、そこでやっと、タキに支えられてるのに気付いた。

「危^{あつぷ}ねーな。言えば着替えくらい取ってやるから、大人しく寝とけ
って」

「す、――すまない」

予想外に近くにあったタキの顔に、一瞬動揺する。声が上擦りかけたの、気付かれてないといいんだけど。

タキが私^{シーファ}をベッドに逆戻りさせる間に、レアルードが着替えを取
ってきてくれた。……あれ、まだことなく機嫌悪そうな気がする
んですがなんで？

……あと、着替えづらいので二人ともガン見するの止めてくれま
せんか。ちよつとくらい視線逸らしてくださいお願いします。
それともこの世界って他人の着替えをガン見する文化でも……い
や、ないな。

……一応、じつと見られたの最初だけで、一部始終余すところな
く観察されることはなかったことは、双方の名誉のために付け加え
ておく。

なんか、気絶でもするんじゃないかって気になったが故のことだ
つたらしい。それにしても半端ない目力だったけどね……。

それは不可避の、（前書き）

ぬるいですが暴力描写があります。

それは不可避の、

改めて眠りについた翌朝の体調は、すこぶる快調とまではいかないものの、まあ旅に支障ないくらいには回復していた。

寄る予定の村までは一日かからないくらいの距離ということで、朝のうちにリリスの町を出るということは昨日話し合ってたんだけど、あっさり出発というわけにはいかなかった。

昨日の前半の体調不良と夜中の悪夢による不調のせいか、やたらと心配してくるレアルードを軽くあしらひ（まともに相手をするとう発を遅らせようとかい出しかねないレベルだった）、突き刺さるピアの視線を意識から除外し、「抱えて行ってやるうか？」とかふざけたことを言うタキをいなして、どうにかこうにか町を出て。

道中は特に問題なく——私にちよつかいかけてくるタキと、それに不機嫌になるレアルードと、それに輪をかけて不機嫌になるピア、という何とも言い難い構図はあったものの——順調に進んだ道程の先、辿り着いた村は。

……略奪の真っ只中であつた。

泣き叫ぶ声がする。親を呼ぶ子どもの声。恐怖と嫌悪に震える女の声。子を守ろうとする親が逃げると叫ぶ。それを嘲笑するかのように響く、下卑た笑い声。

簡素な木造の家の扉が破壊されて、見るも無残に傷ついた男性がそこから転がるように出てきた。——違う、投げ出された。

「……ッ!」

息を呑んだレアルードが、今まさに連れ去られようとしている女性を助けるために駆け出す。一瞬後に別の方向へと走り出したタキが、すれ違いざまに「アンタらはここから動くなよ」と鋭く告げた。

……何、これ。

問いにすらなっていない思考に、『シーファ』の記憶が『盗賊による略奪』だと告げる。

……知っている。それとも、『知っていた』？

——そう、深く考えていなかったただで、『私』は知っていたはずだった。この村が盗賊に荒らされる『運命』にあることを。

『シーファ』が幾度旅を繰り返しても、それを回避することはできなかった。旅の『はじまりの日』は決まっていて、『シーファ』はレアルードと旅に出ることしか許されてなくて、だからどうして

もこの村を救えない。

『シーファ』の記憶の中、何度も何度もこの村は蹂躪されて、荒らされて、搾取され、そしていつか再生する。生々しく、陰惨な光景を経て、『日常』を取り戻す。

そうであってくれと『シーファ』は願って、繰り返し繰り返し復興に手を貸した。気付かれないように、エゴであることを知りながら、己の持てる力を一握りだけ。それすら本当は赦されないと、身を以て思い知る。その繰り返し。

『シーファ』の苦しみを『思い出す』。まるで自分のことのように。

——なのに、どうして。

『私』は、目の前の光景を、遠い映画の出来事のように思ってるんだろう。

叫び声。悲鳴。人間が、殴られる音。

昨日の『血の色の声』より、生々しく身に迫る——そして『私』

が体験したことのない、暴力で彩られた光景。

ショックを覚えて、悲鳴の一つでもあげて、逃げ出してもおかしくないこの光景を、どうしてこんなに平静に見ているんだろう。

混乱してる？ ショックを受けて動けない？ 自覚のないパニック状態？

そのどれもが違うのだと、どうしようもなく『分かって』しまう。

——…シーファ。

きつと、呼びかけても届かない名前を、唇だけで呟いた。
笑い出したいような、泣きたいような——心の中がぐちゃぐちゃでどうしたいのかすらわからない。

「……これも、『出来る限りのこと』のうち、か」

『私』の世界がこと比べてあまりにも平和で、平和すぎるから。
こんなふうに『私』の常識とかけ離れた光景が日常茶飯事に起こるから。

『私』の精神が壊れないように、狂わないように、『シーファ』は制限をかけたのだ。

『基準』を超えた感情が、『私』に認識されないように。

『シーファ』に悪意なんかなくて、全くの善意によるものなのは分かってる。

……だけど、この、『私』の状態が。

『異常』で、『怖い』としか、思えない。

『感覚』でそうあるべきだと思う『自分』と、実際の『自分』が乖離する。

無意識に握りこんだ指先が、震えている。なのにただ荒らされる村の様子を見続ける自分がいる。

気持ち悪い。怖い。いやだ。なんで、こんな、――

「――離してッ！」

唐突に近くから聞こえた怯えを含んだ声に、はっと我に返る。

いつの間に動いたのか、村の奥に近付いていたピアが、屈強な男に捕まえられていた。なんとか拘束を逃れようともがいているが、相手はびくともしない。

近くにはレアルードの姿もタキの姿もない。何人が盗賊と思われる男が倒れているところを見ると、この辺りを制圧した後に奥に向かってしまったらしかった。ピアを捕らえている男は、タイミング悪くレアルード達と会わずにこちらに来たんだろう。

タキが「動くな」と言ったのは、私とピアが近接戦闘に長けていないからだけじゃなく、ちょうどこの場所が死角になるからでもあるのだに——どうしてピアはあそこにいるんだろ。

思考に沈んでピアに気を配っていなかったことを悔やみつつ、自分のとるべき行動を考える。

やみくもに出て行っても勝算はない。まったくできないわけじゃないけど、『シーファ』は接近戦に向いてない。かと言って、魔法を使うには二人の距離が近すぎる。『シーファ』の『魔法』は基本的に範囲指定だから、巻き込まないで済む保証はない。やりようによっては不可能ではないかもしれないけど、細かい指定までできるほど『私』はまだ魔法に慣れてない。

「離せて言うてるでしょ！？ はなッ——」

不自然に途切れた声に目を凝らすと、当身でも食らわされたのかぐったりとしたピアを、男が抱え上げるところだった。

このままだとピアもこの村の人達のように連れ去られてしまう。多少巻き込むのを覚悟で『魔法陣』を顕現させかけたところで、

「おっと、オイタはダメだぜエ、『シーファ・イザン』？」

一瞬で背後に現れた圧倒的な気配と、楽しむような声、そしてねっとりとした『闇』が視界を覆い潰すのを認識したのを最後に。

『私』の意識は、途切れた。

『ジース・アルレイド』

鏡の向こう側、『シーファ』が必死な様子で何かを言う。いつかと同じように声は全然聞こえなくて、『シーファ』はそれでも懸命に何かを伝えようとしていて、『聞こえない』ことにすごく申し訳ない気分になる。

そつと、鏡に触れる。冷たい感触に阻まれて、向こう側に手を伸ばすことはかなわない。だけど、触れた箇所からじわりと染み出すように、『シーファ』の感情と思考の断片が伝わってきた。

何よりも強く感じとれたのは『焦り』。それから、『動揺』。どうして、という思いと、やはり、という諦念。

（勘付かれたか）

（否——まだ『気まぐれ』の範疇のはず）

（直に会いさえしなければ、気付かれることはない——）

『彼』が村に現れることは今まで無かったのに、と考える一方で、あの『接触』のせいだ、と納得する——『私』じゃない、『シーファ』の思考。

『シーファ』が魔法陣を描いた。それがふわりと『私』に向かう。前のものとは違う、その魔法陣が示すのは——外敵を退けるための障壁。

それが『私』を包み込んだ瞬間、弾かれるような衝撃が『私』の意識を揺るがして——意識が、覚醒した。

「——ツてエなあ……」

受けた痛みを表す言葉と裏腹に愉^{たの}しげな笑みを浮かべた顔が、すぐ近くにあった。驚きに一瞬息を呑んで、慌てて現状の把握に努めようと視線を動かせば、彼が手を掛けたんだらう裕がわずかに乱れているのに気付く。

『シーファ』が何のためにあの『魔法』をかけたのか理解して——そしてその危機が未だ去っていないことも同時に知った。

目を開けた私に^{シーファ}気付いているだろうに、大した反応も見せない男は、赤く爛れた——そして今まさに修復されている右手をぶらぶらとさせながら、もう一方の手を伸ばしてくる。再び展開された障壁を力技でこじ開けようとするのに、咄嗟に顕現させた魔方阵で本体ごと吹き飛ばした。

空中でぐるりと回転し、何事もなかったかのように着地した男——『ジラス・アルレイド』を、立ち上がって真正面から見据える。褐色の肌、顔の半分以上を覆う、刺青に似た紋様。切りそろえられていないざんばらの髪が、限りなく黒に近い藍色なのだと『知っている』。

彼もまた、『シーファ』の幾度も繰り返した旅の中で、一度ならず顔を合わせることがさだめられている人物だった。

「——何の、つもりだ」

「アレ、聞こえてなかった？ 『オイタはダメだぜ』って言ったろ？」

「しばらく会わないだろうという趣旨の言葉を聞いたのはつい先日だったと記憶しているが」

「あつはつは、そりや事情が変わっちまったから仕方ない。まア、あつちには介入する予定はなかったんだけどな。っていうっかり手エ出しちまった」

からからと笑う目前の男は、純粋な人間じゃない。もちろん『シーファ』と同じエルフであるわけもない。

『魔王の眷属』、そして——ある意味では『シーファ』の昔馴染みと言える人物、だった。

「俺様悲しい中間管理職だからさア、ちょっと行って来いって言われたら拒否権無いわけよ。魔王サマも何が気になったんだかねエ？」

「私が知るはずがないだろう。……それより、ここから出せ」

「せっかちなだねエ、『シーファ・イザン』。まアもうちょっと付き合えって。まだ『確認』終わってないんでね」

さまざまな色をぐちゃぐちゃに混ぜ込んだ末に出来上がったような混沌の闇が広がるここは『ジラス・アルレイド』のテリトリーだ。『魔王』に近いが故に与えられた力と、ジラスが生来持っていた力が合わさって作り出された、異空間。

ぐにやり、と近くの空間が歪む。そこから溢れだすように現れた
ジアスが操る『闇』を『魔法』で打ち消そうとするも、『闇』は魔
法陣すら塗りつぶす。

——ここは『ジアス・アルレイド』に有利すぎるフィールドなの
だと、『記憶』が告げる。けれどそれは現状を打破するのに何の役
にも立たない。

質量を増した『闇』が幾つもの魔法陣を呑み込んで、その触手を
私に伸ばすのを視界に収めながら、身を翻そうとして——『ジアス・
アルレイド』本人に阻まれた。

「——ッ……！」

「おお痛エいっての。俺様の回復速度上回るたア、また随分とえげつない
『魔法』なことぞ」

音を立てて爛れゆく己の手に頓着せず、私の首を驚掴みにしたジ
アスは飄々と軽口を叩いた。触れた場所から、『シーフア』が作り
上げた『魔法』が無理やり壊される感覚がする。同時に、『シーフ
ア』の中に注ぎ込まれた『闇』が活性化して、身体の自由を奪う。
意識を失っている間に準備が為されていたことを理解して、苦々
しい気持ち湧き上がった。多分、最初の接触時——『闇』によつ
て意識を奪われた時に仕込まれていたんだろう。

「——は、なせ……っ！」

「言われて離すくらいなら最初からやってねエって、なア？ 俺様だってちよっぴり心苦しいんデスヨ？ これでもお前のこと気に入ってんだぜ、『シーファ・イザン』」

そう言いながら、『魔法』を完膚なきまでに壊していく彼の顔は愉しくて仕方がないと言わんばかりの表情だった。

『気に入っている』からこそ愉しんでいるのだと、言われずとも分かる。

『魔法』が壊される速度に反比例して、ジアスが受けるダメージは減少する。時間を巻き戻すかのように『修復』されていく掌の感触が生々しい。

それに顔をしかめる私^{シーファ}を愉しんでいる風なのがまた趣味が悪い、と思う。

……『ジアス・アルレイド』が快樂主義の嗜虐^{サディスト}趣味なのは『シーファ』の記憶からなんとなく分かってたけど、ここまでとは。

完全に壊された『魔法』の残滓が消え去るのを待つて、ジアスは再び私の服^{シーファ}の袷に手をかけた。

「いやア、脱がしても面白くないカラダなの知ってても、なんかイケナイコトしてる気分になるねエ。やっぱ顔は大事ってことかね？」

『シーファ』の服の構造上、あっさりと袷は解かれて。

肌蹴させられた服の隙間から褐色の指が肌に触れた。つう、と指先がなぞるのは、今は発光することもなくただ在るだけの黒色の文様。

「うーん、特に変化はナイっばいんだけどなア……」

ジアスの指が黒色の線に触れるたび、微かにそれが明滅する。

たっぷり時間をかけて文様の全体を確認したジアスに、少しの苛立ちと呆れを込めて言葉を投げた。

「――……気は済んだか」

「うんにゃ？ ケド、ま、いいか。消えてないし壊れてもないなら、魔王サマ的には別に構わないだらーし」

やっと離れたジアスに嘆息する。拘束が解かれたのを感覚で感じ取って、自分できちんと服を整えた。

「そっついや『リアルード』はどうよ？ 『タキ』も一緒みたいだったし。あとあの女も」

「……答えると思うのか」

「儀礼的なアレだって。んな怖い顔すんなよなア」

わざとらしく肩を竦めるのに苛立ちが募るけれど、反応を返せば相手の思うつぼだ。

——それに、聞かなければならないこともある。

『ジラス・アルレイド』は紛れもなく敵側の人物だけど、『魔王』の動向を間接的に知るのに適した人物でもあるのだ。明確な『敵』として現れる場合以外の接触時には、『シーファ』は多少なりと彼と言葉を交わすようにしていた。

もちろん彼の言を完全に信用していたわけじゃなく、ある程度の指標にしていた、ってくらいのレベルだったみたいだけど。

「それで、何を言われてこんなことをしたんだ」

「なんか気になる感じがするから見て来い、的なカンジ？　こういう時下っ端は辛いねエ。その分待遇好いからいいけどさア。何が気になるんだか、と思ってたら俺様の不意打ちも思いつき喰らうし、何？　なんかあったわけ？」

「……………」

「まア、俺様に言う義理はねエけどさ。『最初』は制限かけとくのがお前のやり方なのは知ってるけど、なアんかちよつと違う感じするんだよなア」

それは十中八九『シーファ』の中に『私』が入っているからだろうけれど、もちろん口にはしない。

ちよつとの間首を捻っていたジラスは、「まアいいか」と割合あつさり考えるのを放棄してくれたので、内心安心する。

「んじゃ、まア、そろそろ頃合かね？」

ニヤリと笑ったジアスがパチンと指を鳴らすと、周囲の『闇』が急速に集まって小さな立方体を形作り、ジアスの目前に浮かぶ。それを手にしたジアスが小さく何かを呟けば、『闇』の消失により脆くなっていた空間は簡単に壊れていった。

「——さア、『シーファ・イザン』。せっかくだ、楽しませてくれよ？」

空間の欠片が砕けて宙に消えゆく中、囁くような愉悅の混じった声が耳を掠めて。

投げ出された先には——人質にとられたピアと、彼女を盾にする盗賊の首領、そしてそれに対峙するタキとレアルードという、見覚えがありながらも『記憶』とは決定的に違う光景が、あった。

予定調和

突然宙に現れて落ちてきた（ようにしか見えないだろう）私^{シーファ}に氣付いたタキが目を丸くするのが視界の隅に見えた。でもそれに応える余裕なんてない。今まさに落下中だからとかそんな理由じゃなくて。

ジアスが私^{シーファ}を解放したタイミングと、その場所が問題だったからだ。

もし目の前にジアスが居れば、襟を掴んでがくがく揺さぶってやりたいくらいには趣味の悪い場面選択だった。そして『シーファ』が辿った中には一度もなかった状況でもある。

空中で体勢を立て直して着地する。『シーファ』の身体能力が高くて助かった。それでも着地点のまずさはフォローできないわけだけど。

「——っ、シーファ！？」

レアルードが驚愕に染まった声で私^{シーファ}を呼ぶ。

視線を前へと向ければ、盗賊の後ろ姿、震えるピア、私^{シーファ}を認めて動揺を表すレアルード、どう動くべきか状況を見定めようとするタキ。

……つまり私の位置は、ピアを人質にとっている盗賊の背後、なわけ。

やっと私が現れたことに気付いた盗賊が振り向こうとする。それを待たずに『魔法』を放とうとして——強烈な気持ち悪さに集中が乱れた。

「楽しませてくれよ」——そう言ったジアスの真意を知って、もし次会ったら思う存分『魔法』をぶちかまそうと心に決める。腹いせとしては可愛い部類だと思う。うん。

霧散しかけた『魔法陣』の構成を変化させて、軽い目くらましの『魔法』を発動させる。ギリギリなんとかあったけど、それが限界。意識をそちに振り分けたせいで自分の身体を支える余力もなくなって、元々近かった地面が急速に近づく。せつかく綺麗に着地できたのに地面と仲良こよしにならないといけないとか酷いと思う。

——じわり、とあの黒の文様が疼く。ジアスによる『確認』は、僅かに綻びかけていた『呪』を強化した。そこに加えて、『魔法』使用をトリガーにした仕掛けまでご丁寧に用意されたら、こうなるのは当然と言える。

隙をついたタキが盗賊に斬りかかって、それを辛くも逃れた盗賊から、レアルードがピアを救出する——その一連の出来事は、見えずとも分かった。そして、絶対的な優位を覆された盗賊が、その原因になった私に一矢報いようと殺意をみなぎらせて刃物を振りかぶるのも。

どこかで見た情景。『シーファ』が何度も繰り返したそれを、少し変えただけの、予定調和の『危険』。だけどここ（・・・）に伏兵は——乱入する『タキ』はいない。

もう一度『魔法』を発動させようと試みるも、今度は『魔法陣』が形にすらならなかった。

もちろんまだ身体は思うように動かせるようにはなっていない。

……ああ、これってもしかして『万事休す』ってやつ？

っていうか『私』が『シーファ』になってからこんなのばかりな気がする。昨日今日で問題ない状態だったのって半日にも満たないよね。

痛いのはやだなあ、と思ったのと同時に肩口を鋭い痛みが襲った。そのタイミングの悪さになんだか笑いそうになって、結構ヤバい精神状態なんじゃ、と今更思う。でも村の情景を見た時のような乖離は感じられないから、それほどでもないのかもしれない。『私』にとつての非日常が続きすぎて、ちよつとテンションがハイになっただけで。

まずいかも、と思いつつも動けなくて地面に伏せたままでしたら、盗賊の気配が吹き飛ばされるように瞬間的に遠ざかった。次いで、刺さったままだった粗悪な剣が引き抜かれる感触。

「——っ」

「痛いよな、悪い。でもちよつと我慢してくれな、シーファ」

うつぶせた状態から、傷のない方の肩を支えに起こされる。

視界が霞む——それから、傷のせいだけじゃない、じわじわと広がる熱。『毒』だ、と『シーファ』の記憶が告げる。

……なんか、もう、踏んだり蹴ったりだ。何か憑いてるんじゃないだろうか、私。

『シーファ』の尋常じゃない回復力のせいで既に塞がりかけている傷に気付いたタキが小さく息を吞んで、それからもう一度「悪い」と呟いたかと思うと——手早く取り出した短剣で、傷の付近を浅く切り裂いた。

痛い……はずなんだけど、毒が回って来たのか（随分即効性のある毒らしい）、傷を中心に痺れたように感覚が鈍くなっている。裂かれたことは分かってても、痛みには繋がらない。

傷を露出させるように片肌を脱がされて、新たに血が滲んだ傷口にタキが口を寄せる。ぼんやり知覚したそれに反応するべきなんだろうと思うけど（色々な意味で）、どうにもこうにも身体が思い通りにならなかった。

何度か血を吸いだしては地面に吐き捨てるのを繰り返したタキは、^{シーファ}私の傷が完全に塞がるのを見届けてから、見苦しくない程度に服を整えてくれる。甲斐甲斐しい——っていうのはちよつと違うか。

随分必死な様子だったなあ、と私の身を案じて^{シーファ}だっただろうことを棚に上げて考える。

『シーファ』は毒に耐性があるとか無効化できるとかはないけれど、毒によって死に至ることもない。それを『知っている』から、デフォルトの笑みも軽口もなく必死な様子で処置をするタキがなんだか不思議だった。いや、タキは『知らない』から当然なんだけど。

「ある程度は取り除けたと思うけど——気分は？」

真剣な様子で訊いてくるのにとりあえず言葉を返そうとしたら、ジアスのせいなのか毒のせいなのか、うまく口が動かなかった。それを察したタキが、「話せないなら無理はするなって」と問いを撤回してくれる。

……タキって何気に気遣いできる人だよねえ。惜しむらくは、普段はあえてその辺スルーすることが多々あるってことだけだ。

レアルードもタキくらい察しが良ければピアのこともうちょっとどうにかできるんじゃないのかな、と思ったけど、レアルードって日常生活以外はわりと鋭い方な気がする。注意力の使い方の問題なのかな？

そういえばレアルードはどこに、っていうか何してるんだろう。盗賊吹っ飛ばしたのは多分タキだから、つまりピアを助け出した後のレアルードの動向が不明だったことになる。

……あ、もしかしてピアも怪我とかしちゃったのかな。私と同じで毒くらっちゃったとか。その処置をしてるとか。うん、ありそう。

なんて納得しかけたところで、速攻それが裏切られた。

「シーファ、無事か?!」

勢い込んで視界に入ってきたレアルードの腕に、可愛らしく涙目のピアがくつついている。どう見ても怪我はなさそうだ。予想は全く当たっていなかったらしい。

……あ、いつの間にか視界回復してる。でもまだちょっとぼやけた感じ。傷（もう塞がってるけど）周辺の痺れもまだ残ってるし、動けそうもないなあ。あと返事も難しい。

「毒が少し回ってる。できる限り処置はしたから、安静にさせとくしかねえな。喋るのにもちよつと影響出てるから無理に喋らせるなよ?」

「誰が無理強いなんてするか!」

……言いたいことは分かるけどその言い回しはどうかと思うよ、レアルード。

案の定、タキがなんか微妙な顔になった。

「あー……分かってんならいい。で、そっちの嬢ちゃんは?」

「――…怪我はないようだ。特に乱暴な扱いをされたわけでもない

らしいし——」

淡々と答えるレアルードにちょっとびっくりする。テンションの落差激しくない……？

多少ショックは受けてるけど身体的な害はない、っていう内容のレアルードの報告（？）にどことなく不服そうなピアを観察していて、しきりにある場所をさすっていることに気付く。

……あ、盗賊に掴まれてたところ、ちょっと痣になっちゃってるんだ。

服で大部分は隠れてるけど、レアルードもタキも気付かないことはないだろうくらいには目立つ。

ってことは、レアルードはあれを『怪我』に数えなかったってことなんだろう。で、ピアはそれが不満、ってこと？

確かにあれは痛々しい。ピアは見た目かなり可愛い女の子だし、そんな子に痛々しい痣とかあると気になる——って思うのは、私が『私』だからだろうか。思い切り二人がスルーしてるってことは、この世界ではそんなふうには思わないのが普通なのかもしれない。

でも気になるものは気になるし、ついでにジアスの趣味の悪い仕掛けが無効になってるかを確認するのも兼ねて、威力の低い回復魔法を発動させてみる。

きらきらしいエフェクトと共に、ピアの肌に浮かんでいた痣がすうっと消えた。それに気づいたレアルードとタキがちょっと目を丸くしているのが見える。

……体調に変化がないところを見ると、どうやら仕掛けはなくなったと考えてよさそうだ。そもそもジアスの能力だと、長時間私の『魔法』の発動を阻害することは難しい。今の『シーファ』だからこそ、ああいうちょっかいが可能だったわけだし。

「——ああ、そっか。魔法があつたんじゃん。シーファ、自分に回復魔法すれば毒も抜けるんじゃない？」

「いや、それは無理だ」

「へ？」

タキの言葉を否定したのは私じゃなくて、リアルードだった。『シーファ』と付き合いの長いリアルードは、シーファの『魔法』についても多少知っているのだと『記憶』にある。まあ、そうじゃないと一緒に旅に出るなんてことにはならないよね。

「シーファは自分を対象に魔法を使えないんだ。体質だと言っていた」

「体質……？」

怪訝そうに呟いたタキが私に視線を向ける。何か言おうとしたのか口を開きかけたのが見えて——ふと気づいたように私に駆け寄って跪いたリアルードの身体に阻まれて見えなくなった。

……レアルード、あれだけがうちり腕をホールドしてたピアを一瞬で置き去りにしたよね……。ある意味すごい。縄拔け的な才能ありそう。

「シーファ」

心底氣遣うような目に、なんだかむず痒くなる。……まあ、『シーファ』の表情には出ないんだけど。

「いつまでもこんなところにいても仕方ないし、回復も遅くなるだろう。休めるところに移動しよう」

今更だけど、現在地点は村に隣接した小さな山の一角にある、盗賊達の根城である洞窟だ。薄暗いし肌寒いしじめじめしてるし、長く居て気分がいい場所じゃない。

だからレアルードの提案は歓迎できるものだったわけだけど、残念ながら今の私に自力移動は難しい。まさかその事実を忘れてるなんてことはないよね、とレアルードの頭が鶏以下なんじゃないかとかっさり心配したんだけど、結果的にそれは杞憂以外の何物でもなかった。

……だからってお姫様抱っこ状態での移動は予想外でしたけどね

！　なんでそのチョイス……！？

明らかに面白がってるタキでもあからさまに嫉妬してきてるピアでもどっちでもいいから、誰かつつこんで……！　居た堪れないしものすごく恥ずかしいよこれ。新手の拷問レベルだと思う。本気で。

過剰と必然

「そもそも、お前は自分の身を顧みなさすぎる」

「そんなことは——」

「自覚がないだけだ。とにかく、しばらくは絶対安静だつて言つた
だろう」

とりつくしまのないレアルードに内心途方に暮れる。

『シーファ』の記憶にあるよりちよつとだけ作りの良い部屋とや
わらかなベッドになんだか微妙な気持ちになった。

——ここはレームの町。盗賊に荒らされたあの村から見ればリリスの町のちょうど反対側にあつて、この周辺では規模の大きい部類に入る。そして、タキが受けた届け物の依頼を遂行した後に向かうとしていた町だった。

今、私と^{シーファ}レアルードがいるのはそこにある宿の一室で——ぶつちやけて言う^{シーファ}と、私はレアルードによつてちよつとした監禁状態に置かれていたりする。

……いや、さすがに監禁は言いすぎたかもしれない。何もこの部屋から出してもらえないとかそういうわけじゃないし……。ただし絶対レアルードがついてくるけど。というかまず部屋を出る段階でレアルードにお伺いを立てないといけないけど。

なんでこんなことになったかと言えば、レアルードがなんか色々突き抜けちゃったからだ。

何がどう突き抜けたかを説明するには、まず盗賊の根城があった山から下りた後のことを話さないとならない。

身体がうまく動かせない状態の私をお姫様抱っこで運ぶという、私の精神にクリティカルヒット（もちろん悪い意味で）な行動をとったレアルードは、人ひとり抱えているとは思えない速度（でも絶妙に私に負担を掛けないようにしていた）で山を下りた。

明らかに他二人置き去りにする気満々だった。純粋な前衛向きの人間が本気出すところなるのか、と半ば現実放棄しつつ思ったのは記憶に新しい。

曲がりなりにも仲間である人間を事実上置き去りにしながら村に着いたレアルードは、あれよあれよという間に私を一旦村の人に預ける話をまとめ、入れ違いに村に戻ったタキに私の監視（「絶対目を離すなよ」とか言ってたからアレは監視って言っていいと思う）を頼むと、ものすごい速度で——本当に人間なのか疑わしくなるレベルだった——どこかへ走り去った。

そして何をどうやったのか、戻ってきたレアルードは、そこそこ詭えの良い馬車（とその持ち主）を伴っていた。ヒッチハイク的なことをやったのかと思ったけど、持ち主との会話を聞く限りなんかちょっと違うっぽかった。持ち主っていいところのお坊ちゃん風だったんだけど、何て言うか……憧れとか尊敬とか「一生ついていきます兄貴！」的な崇拜とかそんな感じのキラキラした何かが出てた。一体何が……？

結局詳細は不明なまま、馬車に乘せられ（全員は入らなかったからタキが御者台に座ってた。ついでに御者の仕事までしてた。いや御者の人は居ただけで、ちよつと運転が荒い感じだったから正直助かった）、眠ったんだか気絶したんだか自分でも定かじやない意識の消失から現実に戻れば、今現在居る宿の一室だったわけで。

ちなみに後から判明したんだけど、私、^{シィファ}丸一日目を覚まさなかったらしい。夢も何も見なかったから全然そんな感じしなかったんだけど、やっぱり色々身体に負担がかかってたりしたのかもしれない。

だからまあ、レアルードのちよつと過剰じゃない？って感じの心配っぶりも仕方ないかな、と最初は思ってた。……最初は。

けど、いくらなんでも三日（実質四日）もこの状態なのはどうかと思うんだ……！

絶えず見張られているような生活に嫌気がさして、レアルードにそれとなく旅を再開していいんじゃないか的なことを言ってみた結果が冒頭のやりとりなわけで。

丸一日寝てる間に身体は完全回復してたし、正直ずっとベッドで寝てるのは気が滅入る。

もう大丈夫だから、と何度言ってもレアルードは信じてくれない。確かに体調悪いコンボが続いた拳句に行方不明（仮）になって、なんかよく分からないけど戻ってきたと思ったら刺されて毒まで受けちゃうとか、色々アレな感じだったけど。でも毒は即効性だった代わりに持続性はあんまりなかったし、後遺症みたいなものないみた

いだし、絶対安静っていうほどじゃないと思うんだけどな。

全く外に出してもらえないわけじゃなくても、絶えず見張られる——レアルードにそういうつもりがあるかどうかはともかく、私はそう感じる——のは精神的に辛い。……あれ、なんかデジャヴ？

「レアルード。本当にもう体調は悪くないんだ。心配してくれるのは有難いが、これでは身体も鈍ってしまう」

「——そう言うから予定通りに向かった村で、あんなことにならなかったのなら信じた」

……それを言われると弱い。い、いやだけどここで引き下がったらまた同じ問答の繰り返しになるし！

「あれは、少し悪いことが重なっただけで——…もう、あんな失態は犯さない」

あそこで『ジラス・アルレイド』がちよっかいをかけてこなければ、流石にあんなことにはならなかった。そもそも『シーファ』は実力的にはかなり高いものを持つてる。盗賊に後れを取ることも本来はなかったはずだった。ましてや、丸一日寝込むなんてことも。

『私』が『シーファ』であること、それから『ジラス・アルレイド』の介入によって、その『ありえない』ことは起こってしまった

わけだけど。

あの『毒』もまた、『ジラス・アルレイド』が手を加えたもの。本来ならば少し身体が痺れる程度のもだったのを、毒素を強めてより強力に『作り変えて』いたのだ。

道理で『シーファ』の記憶にあるより効きがいいと思った。……本当、悪趣味にもほどがある。

「——ッ、失態とか、そういう話じゃない！」

たまりかねたように鋭く言ったレアルードにちよつと驚く。でも、ここ数日でレアルードのそんな変化も慣れてしまっていた。

……ああ、また言葉の選択間違っちゃったか……。

「すまない、心配してくれているのは分かっている。怒らせたいわけじゃない。ただ、私は——」

続けようとした言葉は、強めのノックの音にかき消された。

どことなく張り詰めた部屋の空気にも頓着せずに軽やかな足取りで入ってきたのはタキだった。その手には胃に優しくそんな食事の並んだトレイがある。

「食事のお時間ですよーっと。レアルードのは下に用意してあるか

ら行って来い。シーファは俺が見とくから、な？」

「……………。…………分かった」

少しの間を空けて、それでも頷いたレアルードが階下の食堂へと向かう足音を聞きながら、ちよつとだけ溜息を吐く。

耳聴くそれを聞きつけたらしいタキが、面白がってるんだか苦笑してるんだか微妙な声音で「お疲れさん」と言つて、ベッド脇のテーブルに食事を並べてくれる。

「まーた頭に血イ上つてたみたいだな、レアルードは」

「…………私が言葉の選択を間違つたんだ。今日も怒らせてしまった」

「^{レアルード}本人もなー…………一応自覚はあるみたいだぜ？ 自分の精神状態のマズさ。ただ、アンタの前になるとなけなしの冷静さが吹っ飛ぶだけ」

「…………どうすれば、もう大丈夫なのだと分かつてもらえるだろうか」

言葉を尽くすだけ尽くしたし、外見的にはもう健康そのもののはずだし、打てる手が思いつかない。

思わず問いかけるような呟きを漏らしてしまった私に、^{シーファ}タキはあつからかと言つ。

「とりあえずは、レアルードが納得いくまで休んどくしかないんじ

やね？ ……ま、アレ以上に不安定にしたいなら無理に動くのは止めないけどな」

「……やはり、そうか……」

「四六時中見張られてんのはキツイだろうから、その辺はどうにかしてやるよ。レア^{アイツ}ルドの精神安定のためにアンタが参ったらどうしようもねえし」

それは切実をお願いしたい。一も二もなく「頼む」と応えた私に、^{シーファ}タキは軽く笑った。

それにしても……これも一種の自業自得なんだろうか。

まさかここまでレア^{アイツ}ルドがシーファに精神的に依存してるとは思わなかった。多分、「シーファ」も思ってたんだろう。

レア^{アイツ}ルドが『魔王』を倒しに旅に出るのが運命なら、シーファがそれを導いていくのは宿命だ。表だっては無理でも、それとなく彼が『魔王』の元に辿り着けるだけの力を手に入れられるように誘導していく。

それが『シーファ』——ただ一人のエルフの末裔に課せられた、役目だった。

『魔王』を倒すただけに『世界』に幾つもの仕掛けを施し、いつかの未来の『勇者』を定め、そうして最後に『シーファ』だけを残して絶えたエルフという種。

その集大成こそが『シーファ』で、唯一であるが故に、どこにも、誰にも続かない存在。

ただ、『勇者』——レアルードを助け導き、『魔王』を倒すためにだけに存在する『シーファ』。

だからこそ、レアルードが『シーファ』に信頼や親しみを抱くのは当然で（だってそうでないと共に旅に出ることはできないから）、
だけど『今』のようになることだけはこれまで無かったのに。

いくつもの要因が絡み合って、『今回』のレアルードは『シーファ』に依存してしまった。それは本当は、表に出てこないだけで、『今まで』のレアルードだって似たり寄ったりだったのかもしれないけど。

それでもこんなに早い段階でそれが発露したのは——間違いなく『私』のせいだ。

やっぱり自業自得か、と、諦めの境地で溜息を吐いた。

彼のこと、彼らのこと

「——で、アイツの暴走で後回しになってたけど、魔族に会ったって?」

私が食事^{シーファ}に手を付けたのを見計らって、タキが訪ねてくる。
村でレアルードの戻りを待つ間に、簡単にその辺りのことを説明していたのだ。詳細を話し終える前にレアルードが戻ってきて、その後の怒涛の展開により延ばし延ばしになっていたんだけど。

「正確には『魔王の眷属』だ」

「それがよく分かんないんだよな!。どう違うワケ?」

「『魔族』とは、魔王によって生み出されたもの。『魔』を内包し、魔王の意のままに動く。『魔王の眷属』は、自らの意思で魔王に下り、印を与えられることで魔王の配下となったもの。忠誠は誓えど、各々の意思によって動くことが多い」

「……つまり、『魔王の眷属』ってのは後天的になるものだってことでもいいか?」

「そう考えてくれて構わない」

『シーファ』の記憶の中では、『魔族』と『魔王の眷属』は明確に分かたれていた。

そもその成り立ちからして魔王に属する『魔族』と、自ら望み、魔王がそれを受け入れることで成り立つ『魔王の眷属』。

『ジラス・アルレイド』はその中でも魔王に近い立場にあつて、かなりのところを己の裁量で動いていた。『シーファ』と顔見知りなのもそれに関係する部分がある。

「へえ……ソイツ、強いんだよね？」

「……そうだな。今回は様子見のようだったから良かったが、真っ向から手を出してきた場合、退けるのは難しいだろう」

「なるほどな……」

シーファ
私の言葉に何やら考え込むタキをよそに、私は『シーファ』の記憶を探る。

——『ジラス・アルレイド』。

褐色の肌に浮かぶ黒色の紋様が、彼が『魔王の眷属』となった証。

琥珀によく似たその瞳が、柔らかく優しく細められたのを見たのは、『シーファ』の記憶でも遠い遠い昔のことだ。

自らの意思で『魔王』に下ることを選んだ、その理由を『シーファ』は知っている。……そして、悔やんでいた。

「まー、とりあえずはレアルードが落ち着くの待つしかないか。今のままじゃロクに動けもしねえしな」

「……すまない」

「アンタが謝ることでもねえだろ。——それより、ちょっと質問していい？」

タキの声のトーンが変わって、私は反射的に身構える。……なんかイヤな予感。

無言のまま促すと、タキは油断のならない笑みを浮かべて、言った。

「アンタの異常な回復速度の理由、聞き忘れてたなーって思ってたさ」

……ですよねー。そうきますよね訊いちゃいますよね。

忘れててくれないかなとか気付かなかったフリしてくれないかなとか思ってたんだけど、そうはいかないよねやっぱり。

「自分自身に魔法が使えないってんなら、アレは魔法によるモノじゃないってことだろ？ だったらなんか他の理由があるんだよね？」

これだからタキと一対一になるのは怖い。ちょっと気を緩めた頃にひょいっと心臓に悪い質問をしてくるから。

「——その通りだ。ただ、答えは恐らく君の意には沿わない」

「意に沿わないって?」

「どうということのない理由だ。君の知的好奇心を満たすような答えではない」

「別に好奇心だけで訊いてるんじゃないんだけどな。ま、いいから言ってみろって」

あっさり続きを促してくるタキに内心溜息を吐きつつ、答えることにする。引き延ばす答えでもないし。

「体質だ」

「……………」

呆氣にとられたように無言になるタキ。

……うう、居心地悪い。でも一応本当のことだから仕方ない。だって究極的には体質って言う他ないんだよね、これ。

「……………体質?」

確認するように繰り返したタキに頷けば、彼はどういう表情を浮かべるべきか迷った拳句に失敗したような、微妙な顔になった。

「それで納得すると思ってるワケ？」

「納得してもらうしかない。私には他の答えなど用意できない」

『シーファ』がエルフであることを明かすか否か、悩むところなのは確かだ。

『シーファ』がタキにそれを明かすタイミングは、その時々によって違っていた。旅が中盤に差し掛からないうちに明かすこともあれば、『魔王』と相対する終盤まで明かさないこともあった。

……でも、『シーファ』はあんまり『エルフ』であることを仲間に知らせたくないみたいだったから、私もできれば知らせたくない。そういう私の迷いを察したのか、そうじゃないのか——分からないけど、タキはそれ以上の追及は諦めたみたいだった。

助かった……けど、ちょっと違和感を覚える。『シーファ』の記憶にあるより、タキが友好的というかなんというか……。よく考えれば、こうやってレームの町で足止めされてる時点で見切りをつけられてもおかしくないと思うんだけど。

確かに『私』は『シーファ』の記憶の中のタキを知ってるだけで、今回の『タキ』をよく知ってるわけじゃない。だからその思考回路

だって完璧に読めるなんてことはないんだけど、それにしたって違和感は拭えない。

レアルードに引き続いてタキまで変化があるとなると、『シーファ』の中身が『私』だからってだけじゃ説明がつかないような気がするんだけど、どうなんだろう。特にタキはレアルードと違って仲間になるまで私とは接触が無いわけだし。

……まあ、こうやって考えてても答えが出るわけじゃないんだけど。

レアルードのことはともかく、タキが友好的なのは別に悪いことじゃないし、とりあえず目先の問題をどうにかしないとだよね。

「——そういえば、ピアはどうしている？」

ふと思い出して訊いてみる。

ピアもまたこの宿の別室に部屋をとっていて、隙あらばレアルードを部屋に招こうとしていた。毎回断られてるけど諦める様子はない。

怖い思いをしただろうから、精神的ショックとか大丈夫かなと思っただけ、思ったよりタフだったみたいだ。

でも今日はまだレアルードを誘いに来てなかったから、姿を見ていない。だから気になったんだけど。

「レアルードの食事用意したら横からぶんどってって机に並べたから、今頃一緒に食べてるんじゃないかねえの？」

「……そ、そうか」

ぶんどって、って……ある意味すごいよピア。そのバイタリティに敬服するよ。一応健気って言っているのかなこれ。

ピアがレアルードに気があるっていうのは、もうほとんど確信に近い。

っていうかあれだけあからさまなのに気付かない方がおかしい。現にタキはその辺わかってちよつと面白がってるみたいだし。

……なのにレアルードは相変わらずなんだよねえ……。

鈍すぎて気付いてないのかと思ってたんだけど、もしかしたら単純に興味がないのかもしれないところ最近で思い始めた。あんな可愛い子なのにもつたいない、と思うけど、まあ人それぞれだよな。

「ああ、あともう一個訊いときたいことがあったんだけど」

「……何だ」

ちよつと警戒しちゃうのは仕方ない。タキってわりと遠慮なくつつこんでくるし。一応空気読んでくれる時もあるけど。

「アンタの身体に描かれてるのって、何？」

さらりと言われたその質問の内容に、一瞬思考が止まった。

シーファ
私の身体に描かれてるもの、って言えば、それが示すのは一つしかない。あの、魔法陣のような黒い文様。

だけど、あれは。

——タキの目に映るはずがなかったのに、どうして。

これもまた、『変化』のひとつでも言うのだろうか。でもあれは、その人の『素養』によって見えるか否かが決まる。だから『私』が『シーファ』であることは関係ないはずだ。

考える——否、『思い出せ』。恐らく『シーファ』は知っている。その理由を。

——流れの剣士。『証』持ちの双剣使い。稀な赤髪金瞳により、売られた過去を持つ青年。『旅』が進めば『魔法剣士』であることが明かされる人物。

記憶を浚う。改めて認識するとびっくりな知識もあったけど、今求めているのはそれじゃない。

——タキの魔法素養は後天的なもの。元々潜在していた『世界干涉力』の代わりに『彼』が与えた——

辿り着く。

辿り着いてしまった、その『知識』に、ひゅっと息を呑む。

いきなり顔色を変えた私を何事かとタキが注視しているのを感じながらも、私は何も反応を返せない。

タキの赤い髪と金色の瞳の組み合わせ。『シーファ』の記憶の中でも一人しか存在しないその理由。

——それから、似て非なる組み合わせを持つ、『彼』のこと。その、関係性。

出会った瞬間にその人にまつわる情報を——『知識』を余すところなく『思い出せる』なら、こんな驚愕に襲われることなんてなかっただろう。

……ああ、だから。あんなにも『シーファ』は悔やんでいた。

自分の『運命』を知ったことで、彼がその道を選んだからだけじゃなくて。

——血を分けた兄弟が、敵対する宿命を負ったことに責任を感じたからこそ、あれほど悔やんだ。

たとえ当人が、それを是としたのだとしても。

一度目の旅。全ての始まりとなったその旅の中では、純粋な後方支援として仲間に加わった『魔法』の使い手。純粋な魔法ではなく、それによく似せた異能を揮う『魔法使い』。

黒によく似た色彩と、その身に宿した異能のために、タキよりも早くに売られていった——正真正銘血を分けた兄なのだ。旅の最中に判明したその人物こそ。

後に自ら望んで『魔王の眷属』となった——『ジラス・アルレイド』だった。

再びの『対話』

「おい、……おい、シーファ？」

軽く肩を揺さぶられ、ハッと我に返る。どうやら茫然自失状態だったらしい。

「やっぱまだ体調戻ってないのか？——それとも、オレが訊いたのってんなマズい事だったか？」

「……………」

問題があるか否かで言えば、特に問題はない。でも、あの黒い文様が見えることの意味を言ってしまうていいのか、私には判断がでない。

これまで『シーファ』が繰り返した旅の中、タキが保持したままだったことは無かった『世界干渉力』。それが、今回に限って残されている、その理由が分からないから。

どうして、と訊ける人はここに居ない。答えられるのはきつと、『ジラス・アルレイド』だけなのに。

「——いつか、」

気付けば、ぽろりと言葉が口について出ていた。

「いつか、話す。それでは、駄目だろうか」

タキがちょっと驚いたような、意外そうな顔をするのが視界に映る。

ここはさらつと躲すところだったんじゃないかって思っても後の祭りだ。口にした言葉は戻らない。

内心焦っていたら、タキは何だか困ったみたいに小さく溜息を吐いた。

「ンな顔して言われて、ダメだと言ったらオレ冷血人間決定だろ？ ワケありだろーなつてのは分かってるから、アンタがいつて思ったら教えてくれればいいって」

……『ンな顔』って、一体どんな顔してたんだろう、私。^{シーファ}ほとんど無意識だったから分かんないけど、よっぽど哀れっぽい顔だったんだろうか。

「ほら、メシ冷めるし、とりあえず食っちゃえよ。……レアルードに見られながらメシ食つの、イヤだろ？」

その言葉にここ数日で嫌というほど晒されたレアルードの視線を
思い出して、私は慌てて食事の手を早めた。

……いやだって、ガン見とかいうレベルじゃなく見られながら食
べるのって苦行もいいところなんだよ！ 味もろくに分からなくな
って砂嚙んでるような気分になるんだよ……！

* * *

食べ終えてタキと話してる時にレアルードが戻ってきて、タキが
うまい具合にレアルードを誘導して四六時中監視状態からは脱却で
きるようになって、一安心してベッドに沈み込んで。

……そして今、私は覚えのある場所に居る。場所、と言っていい
ものかどうかはちょっと怪しいけど。

真っ暗で自分の身体も見えない、感覚さえも危うい空間——『シ
ーファ』と言葉を交わした空間に。

「これって、この間の、だよね……？」

呟いた声が『私』のものだったから、それはほぼ確信に変わる。
『シーファ』の声は聞こえない。銀色の文字も見えない。でも、

なんとなく、『居る』んじゃないか——『繋がって』るんじゃないか
かと思った。

「シーファ？ ……聞こえる？」

呼びかければ『シーファ』に聞こえるだろうと殆ど確信してたけど、これで返事がなかったらイタイ人だ。
反応を待つ間が、ものすごく長く感じた。……いろんな意味で。

【聞 えて る】

応えがあってほっとする。

……でもやっぱりちよつとホラー風味だ。安定してないってこと
なんだろう。

「聞きたいことがあるんだけど……」

【君が訊 としている事は 見当 ついている】

少しずつ、少しずつ。『シーファ』の声——脳裏に閃く銀色の文字が、明瞭になっていく。

【『ジラス・アルレイド』——それ ら、彼の兄弟 あるタキにつ

いて るっ】

「——あと、レアルードについても。ああなっちゃったのって、私のせいなのかな」

傍から見ても『異常』に足を踏み入れ始めているレアルードの様子が気になって付け加えると、シーファは言葉に迷うみたいに間を空けて、それから答えた。

【君の抱く疑問の殆どは、究極的にはある一点を説明すれば事足りる。だが、それを君に教えることは、まだ出来ない】

「……どういうこと？」

【それを説明することが、君と、君の周りに危険をもたらす可能性が高いからだ】

『私』が知るだけで、私にも私の周り——多分これはレアルードとかタキとかのことだと思うけど——にも危険をもたらすって……どういうことなんだろう。

更に疑問は膨らむけど、シーファはそれが答えの代わりだとも言つように、その内容については触れずに言葉を続ける。

【君には何一つ責はない。レアルードの変化も気にしないでいい。あの状態は長くは続かない】

「じゃあ、元に戻るの？」

【君が言う『元』がどこにあるかに寄るが、少なくとも目的を見失った状態からは脱するだろう】

レアルードの目的っていうと、イコール旅の目的——『魔王』を倒すこと、だよな。

確かに旅の仲間を気遣いすぎて、旅どころか全く移動してないのは『目的を見失った状態』って言えるかもしれない。

【それから、『世界干渉力』をタキが保持したままだったことについてだが、……真意はジアスにしか分からない。ただ——】

「……ただ？」

【……ジアスもまた、何かを為そうとしているのかもしれない。私が君を巻き込んだように、タキに『世界干渉力』を残すことによつて】

……『何かを為す』。

『何か』って、なんだろう。タキが『世界干渉力』を持つてるところで起こる変化が、それに影響を与えるんだとしたら——。

……。

……うん、駄目だ。さっぱり分からない。そもそも『シーファ』

が分からないことを『私』が分かるはずもない。

思考を打ち切って、シーファに別の話題を向けようとしたところで――『私』を『巻き込んで』、シーファが為したいことが何なのか、知らないことに気付いた。

え、今更？　って自分でも思った。うつかりっていうレベルじゃないよねこれ。ちよっと落ち込む。いやでも状況についていくので精一杯だったし……。

『私』がやること自体は分かってたから深く考えたことなかったけど、そもそも『シーファ』が何を考えてこんなことをしたのか――『記憶』を探ってもよく分からない。

『私』は『シーファ』の状態で『魔王』の元に行く。

それが最終的な目標というか、そのために入れ替わりを行ったのは分かっているんだけど。

それがどういう意味を持つのが、分からない。

「……あの、シーファ」

【……？　何だろうか】

「シーファは、何をしたくて、『チェンジリング』の魔法を使ったの？」

とりあえず気になったので、直球で訊いてみる。

『私』と『シーファ』の精神を入れ替える——それを為したのは『チェンジリング』の魔法だ。シーファオリジナルの『魔法』らしい、というのは『記憶』から分かる。

そもそも世界の枠を越える『魔法』っていうのはほぼ無い。そんな事象を起こせる力を持つ人自体が皆無に近いからだ。つまり『シーファ』はレア中のレアみたいな感じ。なんせ唯一のエルフだし。エルフの中でもずば抜けた『世界干渉力』を持ってるらしいし。

姿は見えないけど、シーファが何だか困ってる——緊張してる（？）みたいなのが伝わってくる。

……そんな難しい質問、してないよね？ それともこれも『説明できない』ことに関わってるんだろうか。

だけど、しばらくの沈黙の後、シーファは一番初めに聞いた、あの悲痛な声を思い出させるような声音で、答えた。

【……終わらせたかった、からだ】

【どんな手を使っても、悲願を果たさねばならなかった】

【その結果、君を巻き込むことになってしまったのは、申し訳ないと思っている】

「あ、いや、別に責めてるわけじゃ……」

なんだかシーファの声音が沈んできたので、慌ててフォローを入

れようとしたんだけど。

【すまない。——それでも、私は、】

【これ以外に、 けられ を解く 法を、 けられな た】

全部言い切る前に、思い詰めたみたいなシーファの声が閃いて——途切れて、しまった。

……唐突に切れるのは仕様なんだろうか。シーファにもいつ繋がりか途切れるのかは分からないっぽいけど。別れの挨拶とかこれから先もできなさそうだ。

またあの血の色の文字が現れるんじゃないかとドキドキしたけど、今回はシーファの気配はなくなったものの、空間自体はそのままだった。別の何かが現れる気配もない。……多分。

それにしても、シーファの答えはどういうことなんだろう。

『終わらせたかった』——これは多分、シーファの『記憶』にある『繰り返し』のことだろう。何度も何度も繰り返し『旅』を終わらせたかった、って考えるのが妥当だと思う。

『どんな手を使っても』は、私を巻き込んだことだとして、『悲願を果たさねばならなかった』って……エルフの悲願、だよな？

『魔王を倒す』ことが、エルフの悲願だったと思うんだけど。

『旅』を終わらせる「魔王を倒す——だとして、やっぱりなんで『私』が必要だったのかが分からない。その辺りの『記憶』がうまく探れないのは、やっぱりシーファが『隠して』るんだよね。

『魔王』を倒すために『私』が必要なのか、って考えると、答えはN oだ。だって『魔王』を倒すために必要なのは、究極的には『シーファ』だけだし、——って、え？

……あれ？ 『魔王』を倒す役目を負ってるのってレアルードじゃないの？

だってレアルードはいわゆる『勇者』なわけで。『勇者』が『魔王』の元に辿り着けるようにエルフは世界に幾つも仕掛けをしていったわけで。

……ああ、そっか。『辿り着けるように』なんだ。『倒すため』に旅に出るけど、実際倒すのは『シーファ』ってことが……。いや、倒せなかったわけだけ。

そう、『倒せなかった』。その事実が『記憶』にある。でも、そこで何が起こったのか——起こるのは分からない。

ってことは、その『記憶』が私に知られるとマズいってことなんだろう。

それが多分、『説明できない』って言ったことにも関わってる。

……うーん、これって多分深く考えないでいた方がいいんだろうけど、気になるなあ……。

今度『繋がった』ら、こうやって考えるのがセーフなのかアウトなのかは訊かないと。

あ、そういえばこの間の最後、何て言ったかも訊いておけばよかった。忠告って言うてたし、確認しておいた方がいいよね。

でもいざ会話するってなると忘れそう。メモ帳とかこの空間に持ち込めればいいのに。

まあ夢(?)だし無理ですよね分かってる。そもそも私が忘れなきやいい話だよね……。

『積みりゆく』違い』

——夢を見た。

『シーファ』と話したあの空間のことじゃなくて、純粋な『夢』。……いやもしかしたら違うかもしれない。『私』が『シーファ』だったけれど、あれは多分——『シーファ』の記憶にある情景を『夢』の形で見たんだろう。

暗い——四方が淡く光る石で囲まれた小さな部屋のような場所。中心に祭壇のようなものがあって、その前に立ったシーファの隣には『ジラス』が居た。

いつになく真剣な表情のジラスが、目を合わせないシーファに苛立つて、肩を掴んで無理やり向き合わせて、だけどシーファは相変わらずの無表情で、ジラスの苛立ちの理由にも頓着しない様子で、それがますますジラスを苛立たせて——そして諦めさせた。

それは二人が『仲間』だった頃の、記憶の一欠片。

ジラスが『魔王の眷属』ではなかった頃の、『旅』の一部。

* * *

「……本当に、大丈夫か？」

「そう何度も確認しなくても大丈夫だ。レアルードこそ、ピアを頼む」

「まったく、過保護っつーのも飽きたつての。大丈夫だって言うてんだろ？ 念のため回復専門のヤツに診てもらった方が良いつてのはアンタだって納得しただろーが」

「それは、そうだが——やっぱり、俺も、」

「付き添いは『教会』に顔の利くタキの方が適任だろう。ピアを一人残すのも問題だし、全員で向かうほどのことでもない。そう長い時間ではないから、待っていてくれ」

「……お前がそう言うなら」

レームの町の『教会』にタキと二人で向かうことになってから、何度も何度も何度も飽きるくらい繰り返したやりとりに内心溜息を吐く。飽きるくらいって言うか飽きた。

『教会』には所属の魔法使い——『証』持ちとは別に『教会』そのものに帰属する人が結構いるんだけど、そのうちの回復魔法に精通した人たちはお医者さんみたいなこともしたりする。私の身体シィファの方はもう全然問題ないんだけど、本当に全く問題ないってことをレアルードに納得してもらうためのデモンストレーションというかそんな感じで、一度『教会』で診てもらうことになったのだ。

一見レアルードが付き添いじゃないと意味がないっぽいけど、診断証明書的なものもあるらしいのでそんなことはない。

というわけで、タキと二人、町の中央部にある『教会』へと向か

ったわけだけど。

「……タキ」

「ん？ どうした、疲れたか？」

「いや、それは私の台詞ではないかと思うが。……この町はこんなに治安が悪かったか？」

周囲の惨憺たる有様をあえて見ないようにしつつ訊ねた私に、無謀にも私とタキを捕まえて売り物にしようと近付いてきた集団の最後の一人を容赦なく殴り倒しながら、タキは軽い口調で答えた。

「いいや？ 確かに規模の分だけガラ悪イのも結構いるけど、言うほどじゃなかったハズだぜ？」

「では何故、先程から絡まれ続けているんだろうか。明らかに頻度がおかしいと思うんだが」

今回とった宿は『記憶』にあるよりグレードの高いところで、つまり町の中でも治安の良い区域にあるはずで、ほどよく中心部寄りで『教会』までの距離だって格段に短くなってるはず、だったんだけど。

『教会』への道行の半分もいかない間に、タキが実力モノを言わせて追い払った風体のよろしくないオニイサン方の数は、もう両手両足の指じゃきかない数だったりする。

それはもう、角を曲がる度に新手がこんにちはするレベル。このエンカウント率おかしいって絶対。

『シーファ』の繰り返しした『旅』の中では、このレームの町は割合長く滞在する場所だった。

だからこそ、大体の治安とかわかってるつもりだったし、何度か『私』が宿から出た時（レアルード付きだったけど）に観察した限りでは、アンダーグラウンドの住人っぽい人はこんなふうじゃうじやいなかった。本当どこから湧いてきたんだろうこの人たち。

「んー……多分アレじゃね？」

「『アレ』とは」

「アンタもオレも、金持ってそうだし高く売れそうだし、一石二鳥の金ヅルに見えんだろ。パツと見あんま強そうにも見えねーだろうし」

……言われてみれば確かに。

私は言わずもがな、カミサマ気合い入れすぎたんですか傑作なんですかな感じの線の細い美形だし、タキも希少な色彩持ちで外見も整ってるってことで売り物にするにはうってつけだろう。

そして私は前衛タイプじゃないから見た目無力っぽいし、タキは一応剣提げてるけどどっちかというと細身だ。よくよく観察すると身のこなしが常人じゃないのがわかるけど、それに気付かなければ多人数でかかれれば何とかなると思われても仕方がないのかもしれない。

でもレアルード付きで外出した時はこんなじゃなかったのに……
レアルードがどこからどう見ても前衛でガタイもいいから、はからずしも抑止力になったとかそういう感じなんだろうか。あと今回はカモが複数ってことでの相乗効果？

その後もやっぱりどこからか湧いてくる裏社会の住人っぽい方々をタキが主に拳で黙らせつつ、なんとか辿り着いた『教会』は、『シーファ』の記憶にある通りの壮麗な建物だった。

派手だとか華美だとかまではいかないけど、明らかに建築の水準が違う。お金と技術がふんだんに使われてるんだろって分かって分かるような外観。

『教会』に馴染みのない人ならちよつとばかり踏み入るのに勇気が要るって言うてもおかしくない感じだけど、タキは全く歩みを緩めることなく扉を開いて私を中へと誘う。

……いや、私だつて、『記憶』の上では何度も何度も入ってるわけだし、別にいいんだけど。

ただ、なんか違和感……あ、そっか。

『シーファ』が辿った道筋だと、ここに来るのってタキとじゃなく、レアルードとだからだ。

タキの勧めで幾つか依頼受けて、腕試しとお金貯めるのの一挙にやろってことになるんだよね。タキは先に『教会』に顔出しに行ってたから、タキがこうして『教会』の外で待ってくれてるの見るのが初めてなんだ。

タキの勧めで『教会』を訪れるっていうのはどの『旅』でも同じみたいだから、不可避イベントの一種なんだろうけど……装備とか

整えるためのお金稼ぐのと経験値的なもの稼ぐのと、他に何かここじゃないとダメな理由あったよね。

頑張れ私思い出せ私、絶対なんか重要イベントだったはずだから……！　せめて心の準備してから入りたい。場当たりに『記憶』思い出すのは勘弁……！

「——入り口で立ち止まって、どうかされましたか？　……って、タキ？」

涼やかな声が屋内から聞こえて、それから少しだけ驚いた風にタキの名を呼んで。

そして私は『思い出す』。

いつも笑みを絶やさない、穏やかな『彼』のことを。

「——……『シュウ』」

浮かぶ名前、穏やかな笑顔。少し真面目が過ぎて、軽いノリのタキとはよく口論していた。でも仲が悪いつてわけじゃなくて、むしろ昔からの知り合いだから遠慮なく言い合いができていたのだと知っている。

『シュウ』——シウメリク。

『教会』所属の魔法使い。『使徒』。

知っている。知っている。知っている。

だけどその『記憶』とはある一点が決定的に違うのだと、声を聴いた瞬間から『私』は気付いてしまっていた。そしてそれは、続くタキの言葉で疑いようもないものになる。

「——シウメイリアか。久しぶりだなー」

「それはこちらの台詞です。貴方はいつもあちこちふらふらしているから所在が把握しにくいと、主様が困っていらっしやいました」

「そりゃ、オレは別にただの旅人だしー？ いつでも『教会』に所在把握されてるなんて気色悪い状態はごめん被るな」

「あれだけ主様に目を掛けられていながら、そんな台詞が出てくるだなんて……」

「ご期待に沿えず悪うございましたね、『使徒』サマ？ 光栄デス、とでも言っときゃ満足だったか？」

「また貴方は、そんなふざけた物言いをして。そんなだから、他の『使徒』にやつかまれるんですよ」

いつか『シーファ』の聞いた二人の遣り取りと内容は変わらない、ただと片割れの『声』が違う。

『シウメイリア』。
知っていて、知らない人。

『シーファ』の知る『シュウ』——『シウメリク』の、死んだ双子の妹だったはずの『シウメイリア』がそこに居た。

——ああ、そうか。

『シウメリク』は『シウメイリア』を救えなかったのを悔やんだ。彼女に降りかかった運命を自分が肩代わりできていたらと、願うみたいに思い続けてた。

……それが、きっと、叶ったから。

ここに『シウメリク』はいなくて、『シウメイリア』がいて、そして『シウメリク』と同じ立ち位置で生きている。

どうして『今回』こうなったのかは、『私』には分からない。

『私』が『シーファ』であることで影響を受けるのは、あの『はじまりの日』以降の出来事のはずなのに。

『私』が在ることとは関係なしに、『記憶』とのズレが増えていく。

これは、『シーファ』も予測していたことなのか、それとも予測していなかったことなのか。

『記憶』の中にも『知識』にも答えはない。もしかしたら答えを知っているかもしれない『シーファ』も『ジラス・アルレイド』もここにはいない。

ただ、無性に。

泣きたいような、寂しいような、それでも祝福するような気持ちになったのは。

『シーファ』の記憶があるからなんだろうと、そう、思った。

変わらない『筋書き』

タキがシウメイリアに用件を告げれば、彼女はすぐに私達を奥へと案内してくれた。

「タキが他人と旅を共にするなんて」と、これまた『記憶』と相違ない台詞を告げて嬉しそうに笑ったシウメイリアに、タキはちょっと複雑な顔をしていた。多分、シウメイリアが子供の成長を喜ぶ親みたいな感じだったからだろう。

いろんな手順を省略して（タキが顔馴染み故のサービスみたいなものらしい）さくつと『診察』することになったわけだけど。

「——こんなこと、初めてです」

『心眼』^{シーファ}で私を『視』たシウメイリアが、驚きに目を瞠ってそう言った。

私^{シーファ}としては「やっぱり」としか思わない反応だったけど、タキは違う。「どういうことだ？」と疑問を投げた。

彼女——そして『シウメリク』の持つ『心眼』という異能は、いわゆる透視能力とか第三の目とかそんな感じのものだ。『教会』に帰属する人間は大抵が異能を持っていて、そういう人は基本的に魔法の素質なんかも高い。その例に漏れず、『心眼』を持つ人は、補

助系統の魔法に高い素養を持つ人が多かったりする。

その中でも『シウメリク』の力の強さは飛びぬけていて——つまりその立ち位置に居る『シウメイリア』もまた、強い『心眼』を持っているはずで。

だからこそ、かつて『シウメリク』が言ったのと同じ台詞を『シウメイリア』は口にしたんだろう。

繰り返した、繰り返された、そのやりとり。それは、『シウメリク』が『シウメイリア』になってもやっぱり変わらない。

「本人——シーファさんに拒絶の意思を感じられないのに、きちんと診ることができません。そもそも『視』えにくいんです。まるで、何かに阻害されているみたいに……」

「阻害？」

「靄がかっている、と言えば近いでしょうか。輪郭はぼんやりと把握できるけれど、どの部分も正確には視えないんです。——身体に問題がないことだけは確証を持って言えるのですが」

より正確に（・・・）『シーファ』のことが視えるからこそその台詞。

あと少しでも力が弱ければ、『シーファ』に都合のいい情報だけを与えられるだけで終わっていただろう。他の人を視るときと同じようにきちんと視えたのだと認識させられて、何も不思議に思うことなく。

……こういうイベント（？）を毎回繰り返してたことを考えると、割と『シーファ』って綱渡り状態だったんだなあ……。

絶対にばれたらいけないわけじゃないけど、『エルフ』であることを隠したいなら、『普通』でない証拠が積み重なっていくのは不都合だったはずなのに。

——これも決められた『運命』のうちなら、仕方ないのかもしれないけど。

「よくわかんねーけど、とりあえずシーファは健康体ってことはいんだな？」

「はい。……というか、話を聞いたところでは、それは確定していたのではないのですか？」

「まー、見たトコ回復してんだろーとは思ってたし、本人の申告もあったけど、イマイチ信用ならなかったんだって」

あっけらかんと言うタキ。

……それってつまり、レアルードだけじゃなくてタキも私の言葉信じてなかったってことだよな……？

そんなに私シーファって無理しそうに見えるのかな。確かに元気潑刺とかそういうタイプじゃないから、完全回復したとしてもあんまり分らないかもしれないけど。

でもまあ、これで当初の目的である『レアルードを納得させるた

めのデモンストレーション』は完了だ。

あとは証明書（っぽいもの）を出してもらえばそれでOK。……
なんだけど。

それだけじゃすまないんだろうなあ、っていうのは、『記憶』から分かっていた。

過程が違ってても、同行者が少なくなっても、『筋書き』は変わらない。

定められた『旅』が繰り返される、この現象が終わらない限り、それは絶対のことだ。

案の定、シウメイリアは、快く診断書（のようなもの）を作った後、『シーファ』の記憶にある『シウメリク』と同じ話を切り出した。

「——実は、タキに頼みたい仕事があるんですが」

「またか？ 『使徒』サマ達は何してんだよ。『与えられた力で以て世界に尽くす』のが『教会』の教義じゃありませんでしたかねー？」

「……嫌味を言わないでください。あとその教義の解釈は十分簡略化されていますよ。本来の意味は——」

「アンタと『教会』の教義について議論する気はねえっての。ンで？ 頼みたい仕事って何だ？ 事と次第によっちゃ引き受けないでもないけど」

にやにやと笑いながら言ったタキに、シウメイリアは眉間に皺を寄せる。ちよつと機嫌が傾いたらしい。

真面目な話っぽいのに、相手に全く真剣味が感じられなければ不機嫌にもなるよね。

……そういえばここ数日タキのデフォルトっぽいにやにや顔が無沙汰気味だったのはもしかして私を^{シーファ}心配してたからとか——じゃないよね違うよねそうであってください。

『旅』を繰り返している自覚のある私はともかく、タキもリアルードも『旅』による信頼関係とか情とか絆とかそれ的なものの『積み重ね』はまるつとなかったことになってるんだから、そこまで心配されてると逆に怖い。なんかイレギュラーな力が働いてるとしか思えなくなる。

いや、『私』が『シーファ』であるってこと自体イレギュラーなわけだけど、それとは全く関係ない部分に変化があるのは困るし、……怖い。

その『記憶』との乖離が気にしなくていいレベルのものなのかそうじゃないのか、『私』じゃほとんど判断できないから。

もっと詳しく『記憶』を探れば、ある程度の判断はつくんだろうけど……そこまでするとなんかまたベッドに逆戻りするハメになりそうな気がものすごくする。多分『私』じゃ処理しきれない。

とか考えてるうちにタキに頼みたいお仕事についての説明が終わっていた。聞き流してたけど、『シーファ』の記憶にある内容とは変わりない感じだったのでとりあえず安心する。

シウメイリア——『記憶』では『シウメリク』経由でタキへと回

つてきたお仕事の内容は、簡単に言えば調査依頼だ。近くの森に異常の兆候が見られるから、その原因を軽く探ってほしい、みたいな感じの。

『シーファ』の記憶では、この会話が為されるのはパーティメンバーで幾つかの依頼をこなした後だったんだけど、イレギュラーな流れ（主にレアルードの暴走による）を引き継いだ結果、色々段階をすっ飛ばしてしまったらしい。

……この『お仕事』、わりと重要と言うか、後々に響いてくるものだったと思うんだけど、『記憶』通りの流れになってくれるのかちょっと心配になる。

「——引き受けて、もらえますか？」

「……んー。どうすっかなー」

お仕事モードなのかこれが地なのか（『シウメリク』のことを考えると地なんだろう）かなり真剣な様子のシウメリアに対して、タキはどこまでも軽い。

その二人がそれぞれ違うタイミングでちらりと視線を向けてくるのに、内心苦笑する。

タキが返答を渋るのが私^{シーファ}を始めとする『仲間』ができたことによるものだと思ってるシウメリアと、どうせなら仲間全員で仕事に当たった方が色々と都合がいいけどどうしようかと考えてるタキと。

『記憶』と同じ流れを汲んでいれば、私達^{シーファ}もある程度の評価といつか実績がある状態だから話は簡単だったんだけど、あいにくと今回は違う。

タキがこり押しすれば私達^{シーファ}を巻き込む、というか仕事に参加させる許可を得ることはできるだろうけど、タキはそういうことをするタイプじゃない。——きつと、『嫌な予感』もしていることだろうし。

『記憶』に近い流れにするために口を出すか、全面的にタキの判断に任せてしまうか。

私が答えを出す前に、タキは考えをまとめたらしかった。

「それ、期限とかあんの？」

「いえ、明確なものは。これは民間からの依頼ではなく、『教会』発のものですし。ただ、念のための調査とはいえ、不確定要素を放置しておくわけにもいきませんから、早い方が良いのは確かですが」

「ナルホドね。んじゃ、ちょっと保留にしてもいいか？」

「……保留、ですか？」

タキの言葉に、シウメイリアは不思議そうな顔をする。

即断即決タイプのタキにしては珍しい返答だったからだろう。『シーファ』の記憶の中でも、タキが答えとか選択を保留にしたことはほぼ皆無みだったし。

「そ。一応オレ、今は長期の単独行動はちよつと、な立場だし。不確定要素の多いとこに無計画に突っ込みたくないんだよな」

「……受けるのが難しいようなら、どうか他に回しますが……」

「いや、難しいわけじゃないんだって。どっちかつつと簡単な方だし。ただ、せっかくなら——」

言いながら伸ばされた手が、成り行きを傍観してた私を軽く引き寄せる。そのまま肩に手を回されて、タキの隣に並ばされた。

……別に引き寄せる意味ないよねこれ。視線で示すだけでいいと思っただけ。

「『仲間』と受けたいと思って。別に『証』持ちじゃないといけなようなのじゃないだろ、今回のって」

「——ああ、そういうことですか。確かにこれは、『証』持ちに限定しないとならないものではありませんから、貴方が望むのなら構いませんが、『教会』が自発的に行うものなので、融通の利く貴方に依頼をしたというだけです」

「だと思った。……んじゃ、他の奴ら——『仲間』と幾つか表に出てる依頼こなしで一応の実績残したら、正式依頼として回してもらえるか？ ……シーファ、いいよな？」

空気を読んで無言のままでいたんだけど、意見を聞かれたからには答えないわけにはいかない。

でも訊くの遅いと思うよタキ。ほぼ決定事項だったよね今の流れ。いや別に私としては都合がいいんだけど、ちよつとどうなのと思わないでもない。

「別に私は構わないが——一応、レアルードやピアの意見も聞くべきだろう」

「アンタがいいなら大丈夫だろ」

「……それは、どういう意味だ」

「アンタがいったって言ったならレアルードも間違いなくいった言うだろうし、レアルードがそう言えばピアも反対はしないだろうって意味。……分かってんだろ？」

にやりと人の悪い笑みを浮かべたタキに、思わず深く溜息を吐いてしまったのは——まあ、仕方ないことだと思う。うん。

防具屋にて

タキの予想通り、『教会』からの依頼を受けることに対して、レアルードからもピアからも反対意見は出なかった。

『シーファ』が繰り返していた『旅』のことを考えればいいことなんだろうけど、何だか微妙な気持ちになってしまったのは仕方ない。

さすがに『教会』お墨付きで健康体なことが証明されたので、レアルードの私の体調^{シーファ}についての疑惑はなくなった……と思う。ちょっと曖昧な言い方になるのは、レアルードの過保護っぷりが微妙に残ったままだからだ。まあ、許容範囲かな、とは思うけど。

元々パーティーメンバーってことで殆どの行動は一緒になるわけだし、部屋から出してもらえないとかそういうのさえなければ別にいいんじゃないかと思う。

ちよつと感覚麻痺してるんじゃないかと思わないでもないけど、今まで『シーファ』が繰り返した旅でも、距離感としてはこんなものだったみたいだし。

で、とりあえず『教会』の依頼を受けることは決定なわけだけど、その前に『教会』に実績を示さないとならないわけで。

そのための一般向けの『依頼』の物色にタキが行って、私と^{シーファ}レアルードとピアはひとまず入用なもの——装備とかを道具とかそういうもの——を充実させるために買い物に繰り出したわけだけ。

「ねえ、レアルードっ！ これどうかな？」

「いいんじゃないか」

「じゃあ、これは？」

「いいんじゃないか」

どうしよう、ものすごく居た堪れない……！

服と防具を売ってる店で、ピアが商品を手にとってはレアルードの意見を聞いてるんだけど、明らかにレアルードの対応が適当だ。さつきから聞いてると、ほぼ「いいんじゃないか」しか言っていない。露出度が高かったり、デザイン可愛いけどそれただの布だよね、なものだったり――防具として機能しなさそうなものを示した時だけ、「それは戦闘向きじゃないだろう」とか言ってたけど。

……私は改めて買う必要がない装備なので、傍観しつつ、軽く店内を見回ったりしていた。でも正直、ここに居合わせる必要はないよね？

別に新しく装備を買ってもいいんだけど、今私が着てるのは魔法耐性に優れたローブ（エルフ特製）なのだ。

更に『シーファ』が色々細工して、物理耐性の効果もつけようと思えばつけられるという、旅の始まりから終わりまでぶっ通しで使ってもいいような、バランスブレイカーな代物だ。なんとと言っても意思一つで耐性を最高値まで上げられるとかいう恐ろしい性能を持っている。

さすがに旅のしょっぱなからそんなもの着てると変なので、段階

的に改造するのが常だったみたいなんだけど、どうやら『私』のために先回りして細工しておいてくれたらしい。有難い。

というわけで私に装備の新調は必要ないんだけど、レアルードとピアは違う。

特にピアはただでさえ物理耐性というか防御力というか、そういうの無いし。いや『シーファ』もだけど、異常な回復力があるので多少はマシだ。

でもピアはただの人間だし、レアルードみたいに『勇者』としての特典みたいなのもないし——って、じゃあなんでピアは旅についできたんだろう。今更過ぎるけど、気になる。

やっぱりレアルードを慕ってたからとかそんな感じなのかな。そのため弓とか覚えたんならすごい。

「じゃ、じゃあ、これは？」

「いいんじゃないか」

「……………」

「……………」

ぼんやり思考に耽ってたら、なんだかピアとレアルードの間の空気が微妙なものになっていた。

まあ、あの調子で会話してたのなら当然だと思う。彼女の買い物に付き合わされて意見求められるけど興味のない彼氏、みたいな構図だったもんね……。

むう、と頬を膨らませたピアは、ずいっとレアルードに接近する。結構な身長差から、上目遣いになるのは必然だ。大抵の男ならコロツといきそうな可愛さ全開で、甘えるように口を開く。

「やっぱり、レアルードが選んで？」

「……選ぶ？ 俺が？」

眉を顰めたレアルードにも怯まずに、ピアは頷いた。

「うん。レアルードはこういうの、選ぶの慣れてるでしょ？ だから、お願いっ！」

傍から見ているとお見事としか言いようがない完璧な笑顔を浮かべたピアに、レアルードは。

「自分の身を守るものを、他人の手で選ばせるのはおかしいんじゃないか」

まったくもって空気を読まない発言で、周囲の空気を凍りつかせた。

私^{シーファ}だけじゃない。カウンター（っぱいもの）の向こうにいる店主も、店内の他のお客さんも、この遣り取りの行く末がどうなるか窺っている気配がする。

……うん、見目の良い二人組があんな会話してたら気になるよね。しかも男の方が明らかに空気読んでなかったら尚更ね……。

とりあえず近くにいろと何だかマズイことになりそうな気がしたので、こそそと店の隅に移動する。ここならレアルードからもピアからも見えないだろう、というところで足を止めた。すると。

……うわぁ、なんでこんなところに。

かろうじて口に出すことは阻止したけど、誰彼構わずこんなところに放置している責任を問いたい気分になる物がそこにあった。

真っ黒い、光を反射するのではなく飲み込むような、深い深い漆黒の——腕輪。

オシャレに言えばブレスレットだけど、その物体の由来——もとい正体を知ってるので、間違ってもオシャレになんて言いたくない。飾り気のない、シンプルなそれは、一見ただの装飾具だ。だけどそうじゃないんだと『シーファ』の記憶が告げてくる。

——それは『魔剣』。

いつか必ず『旅』のどこかで、レアルードの持つ『聖剣』と刃を交える、呪われた剣。

本当に何でこんなところにひょいっと現れちゃってるんだろこれ。今までの『旅』だと魔剣に憑かれた人間が『聖剣』に惹かれて現れてそのまま戦闘、って形だったけど……。

好奇心で値段を確認してみる。……いわゆる二束三文って感じだった。

なるほど、特に何の効果もない腕輪だからこの値段なのか。そして『魔剣』に都合のいい人間を引き寄せて買わせて駒にする、と。

……本当、胸糞悪い仕掛けだことで。

見つけてしまったからには放置しておくのも憚られる。『旅』において、『魔剣』と『聖剣』の対峙はそこまで重要イベントではなかったはずだ。あえて言うなら『聖剣』の誕生秘話シイファに関わる程度でもその辺りのことなら、タイミングを見て私が伝えればいいんじゃないかと思うし、……何より、『魔剣』に憑かれるのは『人間』と決まってる。わかってて放置できるほど、『私』は割り切れない。

仕方なく、漆黒の腕輪を手にとって、店主の元に向かうことにする。さっさと精算して四次元ポケット——もとい荷物の奥につっこんでおくことにしよう。

そう思っただけで歩き出した、んだけど。

……何故か壁にぶつかった。否、予想外に近くにいた人物に激突した。

恐らく胸だと思われる辺りに思いつき顔をぶつけてたたらを踏む。

ふらついた身体を、伸びてきた手が支えてくれた。その感触に何故か覚えがある気がして、不思議に思っただけ顔を上げる。

「……大丈夫か」

見下ろしてくるその人は、なんというか、——一言でいえば不審者だった。

長い前髪で目元は見えないし、高さのある襟で口元も見えない。全身真っ黒で大剣背負って、露出している部分は顔の中央部だけという徹底っぷり。

決して背が低いわけじゃない『シーファ』が思いつきり見上げないと目線（目は見えないけど）が合わないことからして、相当体格が良いことがわかる。

「大丈夫だ。すまない、気付かなかった」

しっかり自分の足で立ったのを見計らって支えていた手を離してくれるという紳士さに、『記憶』が刺激される。……多分、『シーファ』の知り合い、というか『旅』の仲間になり得る人なんだろう。

手を離れた後も何故か無言で見下ろしてくるのに、『記憶』を探りつつ見返す。

声を聞いて姿を見て、それでも即座に思い出せないなら、パーティに入る頻度は低い人物だろう。その内でこの体格、恐らく獲物は重量級となると、候補は絞られる。だとすると。

——『記憶』から探り当てられた人物に、内心首を傾げる。

『魔剣』のことじゃないけど、どうしてこんなところにいるのか

分からない人物だ。

『旅』の終盤、最後の町で、運が良ければ『仲間』に入ってくれることもある——そんな程度の関わりのはずなただけ。

そもそもしゃゆるダンジョン以外で会うことが最後の最後まで無いのが『彼』だった気がするんだけど……まあいいか。考えても仕方ない。どちらにしろ、今関わるつもりもないし。

「ぶつかって、すまなかった。支えてくれてありがとう」

意識して笑みを浮かべて、『彼』の脇をすり抜けてカウンターへ。その間際、聞こえた声には、気付かないふりをして。

——気をつける。でないと『喰われる』ぞ。

……心配しなくても大丈夫ですよ『闇の人』。

『私』は『魔剣』に喰われない。喰われることなんてありはしない。……狂うことなどできない。そういうふうにいるんだから。

聖剣

精算を済ませて実は魔剣な腕輪を荷物につっこみ、ピアとリアルードの様子を窺ってみれば、どうやら結局ピアは自分で自分の装備を選ぶことにしたらしかった。

リアルードはピアから離れたところで、幾つかの装備品を物色している。

ちらちら視線を向けているピアに気付いているのかいないのか――あれは多分気付いてない。もしくは完璧にスルーしてるか。

……リアルードって、ピアを旅の仲間に加えるのを決めたわりに結構扱いが突き放した感じだね。実はひそかに想い合っていて、とか考えてたんだけど、この様子じゃ全くなさそうだ。

どうやらピアの防具選びはまだかかりそうだし、先に道具系を揃えに行こうかな。大体必要なものはわかってるし、ある程度は私^{シーファ}だけでも大丈夫だろう。

「リアルード。私は先に他の店を見ていようかと思うんだが、いいだろうか」

「……シーファ」

声を掛けて先手必勝とばかりに用件を伝えると、手に取っていた品物を戻して、リアルード^{シーファ}が私に向き合った。その碧の瞳には非難によく似た感情がちらついている。

……あ、なんか却下されそうな予感。

「タキと『教会』に行ったときも随分絡まれたって聞いたぞ。一人で行動するのは危ない」

「それは、タキと二人だったからだろう。一人で目立たないように行動すれば、それほどの危険はないはずだ」

「シーファは楽観的すぎる。自分の容姿がどれくらい目立つか分かってないだろう」

いやいや、十分すぎるくらい分かっていると思うんだけどな。こんな凶悪なまでに整った顔、初めて見たし。あんまりにも人間離れしてるから現実味がないのは確かだけど、目立つのは分かっている……と思う。『シーファ』自身、結構面倒な目に遭ってきたっていうのは『記憶』にあるし。

それに、『シーファ』の記憶によれば、やりようによっては結構気付かれないはずなのだ。この尋常じゃなく整った顔も、煌めく銀髪も、透き通る白い肌も。

要は存在を極力気付かせなければいい。気配を消して道の隅を歩けばそうそう気付かれない程度の技術（隠密行動のための、というのが気になるけど。必要になる事態があるってことだよね……？）を『シーファ』は身につけてるし、その知識のある『私』もそれが可能なわけで。

それに、一人で行動するのがダメだって言われるほど、自分の身を守れないわけじゃない。少なくとも絡まれても逃げるくらいのスキルはある。

……っていうのを懇切丁寧に伝えても無駄なんだろうなあ。この様子だと。

『シーファ』の身を案じるレアルードの視線は、単独行動を許してくれそうもない強さだ。これを丸め込むのに労力を注ぐくらいなら、ピア（とレアルード）の買物に付き合った方がまだマシだろう。

「——この界限なら、そうそう危険な目には遭わないと思うんだが……分かった。一人で行くのは止めておく」

「分かってくれたなら、いい」

表情を緩ませるレアルードに、やっぱり内心首を傾げる。

これまでの『旅』で、ここまで心配されたことって無い。というか今回の旅に出る以前の村での生活でも無い。

『シーファ』は旅の資金集めと、一応人間らしく生活を営んでるように見せるために薬師みたいなことをしてたんだけど、そういう時は別に心配されなかったし。いや、こういう街中じゃなかったからかもしれないけど。

とりあえず、一人で行動できないとなったら、ここでの用事を早く済ませてしまうに限る。つまりピアの防具選びが終わればいいわ

けだ。

とはいえ、私が^{シーファ}ピアに助言とかしても聞き入れてもらえるのかは微妙なところだ。むしろ反発されそうな気がする。

そうとなればリアルードに協力を仰ぐのが一番の近道なわけだけど——ついさっき、内容はもつともなんだけど空気読まない発言してたしなあ。協力してくれるだろうか。

というかそもそも、リアルードは何か買っただろうか。一応さつきは商品を見てみたいだけだ。

ちよつと気になったので訊ねてみると、買うつもりはないのとことだった。まだ必要ないらしい。

まあ、リアルードの身に着けてる防具は、この先三つくらい町を過ぎた辺りまでは現役で大丈夫なくらいの性能（シーファの記憶より）だからいいのかな。あれもこれも買いそうな雰囲気になってるピアとは正反対っぱい。

旅は何かとお金が入用になるし、節約は大事だと思う。うん。

ゲームとかのお約束だと、新しいフィールドに辿り着く度に新装備が売られてたりしたような気がするけど、さすがにこの世界でそういうのはない。大きい町なら値段の割に質のいい防具とか武器とか売ってることもあるってくらいで。多分流通とか生産力とかの問題なんだろう。

旅が進めば、武器マニアとか防具マニアとかそんな感じの人からだったり国に行ったりで、普通には売られてないようなのも手に入られるみたいだけど。

でもレア中のレアな武器はもう手に入ってるんだよね。私の^{シーファ}じゃないけど。

レアルードの利き腕側に提げられている剣を見る。現状ただの荷物でしかないそれは、だけど捨てるわけにも売るわけにもいかない代物だ。

私の視線に気づいたレアルードが、それ——『聖剣』に軽く触れた。

「……そういえば旅に出てから『解析』してなかったな。するか？」

軽い調子でレアルードが訊いてくるのに、少しだけ考えて首を横に振る。

『解析』というのは、対外的には『聖剣』に興味があつたシーファが、『魔法』によつて性能やらルーツやら扱う条件やらを探るのと、とかそんな感じになっている。実際やるのは『聖剣』の調整——調律？ のようなもので、性能もルーツも扱う条件も、調べるまでもなく『シーファ』は知っているんだけど。

レアルードは『聖剣』に選ばれたから『勇者』になった。でもだからつて、即座に『聖剣』を扱えるかといったらそうじゃない。

『シーファ』の記憶によれば、精神負荷が凄まじいからとか何とかいう理由でまだ装備（つまり戦闘用に使用）できないらしい。ステータスが足りないから装備できない、みたいなものだろうか。

『聖剣』の名にふさわしく何やら色々規格外な力を持つ代物なわけだけど、使い手の技量が追い付いていない段階では、その力はむしろ危険極まりない。

完全に封じられてた頃ならともかく、レアルードが『選ばれた』あとはちよくちよく私が力の調律をしないといけないという、結構面倒な一面もある。

……まあ、暴走させたくはないから調律するのは別にいいんだけど、もつと手のかからない仕組みにすればよかったのに、と思わなくもない。魔王の元に辿り着けるようにするためには、それくらいの力が必要だったってことなんだろうけど。

剣が内包する力を自分の支配下に置いて、その流れを整える。それが『シーファ』の記憶の中での『解析』だ。

……でもどう考えても『解析』とは呼べないよねこれ。実際やっていることとしては。

本当のこと言うわけにはいかないから仕方ないだろうけど……だって聖剣を支配下に置けるって、『勇者』のレアルードでさえ無理なのに不審過ぎる。

『シーファ』には聖剣が反応しない——聖剣は選ばれたものが鞘から抜くと刀身が輝くというオプシオンがあったりする——としても、おかしく思われるのは避けられないだろうし。

どうでもいいけど光る剣って、奇襲には絶対的に向かないよね。まあ勇者だからそんなことしないんだろうけど。

というか何のためにそんなオプシオン付けたんだろう……一目見て『勇者』って分かるようにするためなのかな。……うーん、大昔のエルフの皆さんの考えは分からない……。

考え込んでたら、何やらレアルードが気遣わしげな表情になった。何故このタイミングで。

……私の表情って基本無表情だから、無駄に深刻に見えたんだろうか。

「……大丈夫か？」

えーと、何その脈絡のない問いかけ。いやあるのかな。

でも何に對しての問いかけなのか謎だよレアルード。もうちょっと言葉を足してくれると助かります。

普通に考えれば体調についてとかかな、と思うんだけど、ちょっと考え込んでただけで体調を心配されるほど見た目不健康そうではない……はず。

だからと言って他の何についてかも思いつかないんだけど。

でもまあわざわざ何についてかとか聞くのもアレなので、無難に笑みを返しておくことにする。ごまかし笑いとも言っけど。

「……………」

納得したのかそうじゃないかは分からないものの、そのまま黙り込むレアルード。

……いや、無言は別にいいんだけど、意味ありげにじっと見つめてくるのは何なんだろう。謎すぎるよレアルード。

『シーファ』の記憶からするとこんな思わせぶりな行動するタイプじゃなかったと思うんだけど……あの過剰なくらいの心配っぷりと何か関係があるんだろうか。さっぱり共通項は見つからないけど、なんとなくそんな気がする。まあ、関係があったからって、何の解決にもならないんだけどね……。

依頼

結局全ての買い物が終わったのは、陽も沈もうとする頃だった。これが一般的な旅人の買い物にかかる時間なのかはちょっと分からないけど、とりあえず疲れた。精神的に。

レアルードに協力を仰いでピアの防具選びは終わらせたものの、武器屋と道具屋でも似たり寄ったりなりとりをして結構時間をロスしたし、道具屋以外はそもそも自分で見るものが無いから付き合ってるだけなわけで、正直レアルードの懸念をスルーして一人で先に進みたい気持ちに何度なったことが。……いや、防具屋での二の舞になるから口にはしなかったけど。

まあ地味に色々ありつつ、やっと『教会』に向かえたわけだけども――。

「あら、やだタキ。こんな私好みの美形どこに隠してたのよ」

「隠してねえって。言っただろ？ 連れが居るってさ」

「言っただけで私好みの美形だとは聞いてないわよ。……あらでもあなた、男？ 女？」

……なんで私、デキる女風の美人なお姉さんに絡まれてるんでは

ようか。

『教会』に着いた私（とレアルードとピア）が見たのは、女の人
三人と歓談してるタキだった。

女の人のうち二人は旅人（っていうか冒険者？）風の格好をして
いて、残り一人はタキ含めた三人と並ぶとちよつと雰囲気が違う感
じの——少なくとも荒事には向かなそうな——人だった。

私達に気付いたタキが手を挙げて声を掛けてきて、それと同時に
こっちに向かつてきた件の毛色の違う女の人^{シーフア}が私の目前まで来たか
と思うと——何故か私の肩をがしつと掴んだ。目がなんか肉食獣み
たいだった。ターゲットロックオン、的な。

あんまりにも唐突な行動に反応できなかった私を尻目にその女の
人とタキが交わしたのが先述の会話なわけで。

とりあえず安心してゐるわけにもいかないので、向けられた疑問に
答えておくことにする。

「……女に見えるか？」

「——見えないわね。顔だけなら……いえ、胸さえあれば見えるの
に残念だわ」

え、残念なのってそこの？

……あ、『思い出し』た。この人、ここの『教会』常駐の『使徒』

だ。シウメイリアもそうだけど、彼女と違って魔法使いじゃない、いわゆる受付みたいなことをしてる人だったはず。

そしてなんとというか微妙な気分になるしかないんだけど、このやりとりも『旅』毎に繰り返してた気がする。そうだよこの人可愛い女の子とか美人な女の人とか大好きな人だったよ。あと微妙に男嫌いだった気が。

タキと私は例外扱いになってたけど、『シウメリク』は微妙なラインだった。多分同じ『使徒』だったからなんだろうけど。リアルードはある理由でちよつと対応柔らかかったけど、基本スルーされてたはず。

「ああでも男でもこんな好みの美形ならいいかも。ねえあなた、ちよつとこれからイイコトしない？」

「こら、人の仲間を会って早々に口説くな。っつーかネル、お前男ダメなんじゃなかったのかよ」

「——そうよね。つい本能に任せて口走っちゃったんだけど、いくら理想が服着て歩いてるような見た目でも男だし無理なはずよね。でもなんかイけそうな気がするのよ。どうしてかしら」

「いや訊かれても。そりゃシーファは稀に見る美形だけだな」

当事者（と言ってもいいはず）の私を置いて続けられる会話にも既視感を覚える。

……とりあえず女の子好き＋男嫌いの本能すごい。『シーファ』、どっちでもないからな……。

「——イイコトはしない。それと、離れてもらえないだろうか」

ある意味鋭い発言をしている間も肩を掴まれて肉薄されたままだった。さすがにこの状態は居心地悪い。

——それに、なんか背後から不穏な空気が。誰が発してるのかは自明の理なんだけど、何故。

「あら、ごめんなさい。あんまりにも目の保養だったものだからつい」

そんなことを言いつつも結構あっさりと彼女——ネルは離れてくれた。っていうか、ぶっちゃけ胸当たってましたよお姉さん。肩掴むだけじゃなくて身体も寄せてきてたから。うっかりキスしそうな距離になってたから。

軽々しくそういうことしない（対男限定だけど）って知ってるけど、一応対外的には私は男なので^{シイファ}気をつけた方が良くと思います。

物理的には離れたものの相変わらず獲物を狙う肉食獣みたいな視線を向けられながら、タキに向き直る。

……わあ両手に花状態。冒険者っぽい見た目の女の人（両方美人）が両脇に控えてるような状態でにこやかに笑いかけられてもタラシにしか見えないよタキ。

……まあ、口説いてたとかじゃないっていうのは分かってるんだけど。多分情報収集のためとかだろう。

タキは女性受けがいいけど、軽々しく口説いたりはしない。軽口みたいなのもかく。……それがタラシっぽい印象を与えるんだけど、会話を円滑にする処世術みたいなものだし仕方ないだろう。

爽やかな——とすれば胡散臭い感じの笑顔でタキが何か言っと、二人の美人さんは軽くタキの肩を叩いてから去っていった。

なんかちよつと親しげな感じだったけど、もともと知り合いとかだったのかもしれない。シウメイリアみたいに。

ともかくも余計な人員がいなくなったのでタキと合流することにする。いやまだネルはい居るんだけど、問題はない。だって——。

「さあて、役者も揃ったようだし、お仕事といこうかしら。タキ、それからお仲間さん達、こちらへどうぞ」

言つて、少し奥にあるテーブルに誘うネル。

なんかちよつと困惑した空気がリアルードとピアの方から漂ってきたけど、私は元々この流れを知っていたので戸惑うことはない。

さつさと席に着こうとしてるタキに続くようにしてテーブルに近付いた。遅れてリアルード、そしてピアの順で同じようにテーブルに向かう気配。

それぞれのネルへの認識はバラバラだろうけど、とりあえず問題なく話ができる状態になったところで、タキが口を開いた。

「紹介してなかったけど、コイツはネル。『教会』の——まあ、案内人みたいなもんか。シウメイリアの方から話通してもらって、ち

よつと手エ貸してもらうことになった」

「ご挨拶が遅れてごめんなさい。改めて名乗らせてもらうけれど、ネルよ。一応『教会』の『使徒』をやってるわ。少しの間でしようけど、よろしくね」

につこり笑ってそう言うネルに釣られるような形で、私含む残り三人も名乗る。

レアルードが名乗った時になんだかネルが少しだけ驚いてたっぽいけど、多分私以外は気付かなかっただろう。私も『記憶』で知ってなかったら見過ごしたくらいの微妙な変化だったし。

「それじゃあ早速本題といきましょうか。まずは――」

くるりとネルが指先を回す。と、そこにスクリーンのようなものが現れた。レアルードとピアが息を呑む気配がする。

「ネルは『投影』の異能持ちなんだよ。『具現』つつた方が分かり易いか？」

「これはタキの選んだ依頼の内容を映し出しているだけだから、特に危険なものじゃないわ。――だからその金髪のあなた、剣に手をかけるのは止めてもらえないかしら」

ネルの言葉にちらりとレアルードを見たら、本当に剣の柄に手を

かけてた。^{シニア}私の視線に気づいて離れたけど。……いやいや、物騒だよリアルード。どれだけ周り警戒してるの。

「タキが選んだ依頼は四つね。二人一組の初級が二つ、団体用の中級、上級が一つずつ。ちょうどいい初級の依頼が今ちょうど無いのよ。悪いけれど我慢してちょうだい」

初級、中級、上級というのは『教会』で受けられる一般の依頼の、一番メジャーな分け方だ。

もうちよつと詳しいランク分けもあるみたいなんだけど、一般向けに開放されてるのだったら大体この三段階で分ければ問題ない。

初級は小金稼ぎ程度の、言ってみれば子供のお使いみたいな感じ。もし依頼遂行が成らなくてもそんなに問題にならないやつとか、町の中をパシリよろしく走り回ったりするようなとか、どこそこのペットが逃げたので捕まえてくださいとか、そういう感じのがここに入る。

中級は初級である程度の実績を積みば受けられるようになる。

金払いの良いやつとか、依頼が大切な内容とかが主で、たまに魔法開発の実験台とかもあったりする。

命の危険はないけど、多少の怪我をしたり、依頼を失敗すれば評判に傷がつくこともある。得るものも大きくなるけど、その分責任も増すという——まあそんなの当たり前なんだけど。

そして上級は、中級で実績を積んで、ついでに戦闘的な意味での実力も問題ないと認められたら好きに受けられるようになる。実力が微妙な場合は、受けられる依頼の内容に制限が掛かるらしい。

というのも、上級は大体戦闘が付き物だからだ。町の外での採取から凶暴な獣その他諸々の討伐まで幅広いから、ある程度の戦闘能力がないとやっていけない。

だから、『教会』の管轄区域が町の中だけのリリースの町では、確かに上級の依頼が受けられなかったはずだ。『今回』は行っていないから確証はないけど、『シーファ』が何度となく繰り返した『旅』の中ではいつもそうだったんだから、多分今回もそうなんだろう。

今居るレームの町は『教会』の管轄区域が広いから上級の依頼も結構ある。

各級、ピンからキリまであるはずだけど、一体どんな内容にしたんだろう。っていうか本来こんな依頼の受け方って無理だよ。実績積む前に全種類先取りとか。

タキ、『証』持ちだからって無茶やりすぎじゃないだろうか。『教会』が許したんだからいいんだろうけど……。

「……二人、一組？」

つらつらと依頼の分類について『知識』を探ってたら、なんかレアルードが不穏な気配を醸し出してた。……え、また？

「そんな怖い顔すんなって。仕方ないだろ？ 団体用の依頼がしばらくないってんだから」

「……………」

軽い調子で補足したタキを無言で見つめるレアルード——とかこれは明らかに睨んでるよね。一応仲間なんですがなんでそんな鋭い目をするのかな。

最近はこちらと打ち解けてきたんじゃない？ って感じだったのに逆戻りですかっというレベル。正直威圧感がヤバイです。

「内容からしてそんなに長くはかからないはずよ。せいぜい半日から一日つてところかしら。申し訳ないけれど、こちらの方で組み合わせは決めさせてもらったわ。早く中級認定をってことだったから補助——もとい監視として片方には私が付くことになってるの。もう一方はタキを媒体として『心眼』で監視してもらうことになったから。ちなみにこれは決定事項だから、そんなに殺気立ったって覆らないわよ」

……わあ、ネルすごい。説明の間にだんだん威圧が高まってそれどころか殺気によく似たものがレアルードから発され始めたんだけど全く動じてない。それどころか余裕の微笑みすら浮かべてる。さすが『使徒』。いや『使徒』がどうこうっていうよりネルだからか……。

とりあえず一つ溜息を吐いて、レアルードに視線を向けた。

「レアルード」

ぴくり、と反応して不穏な気配を消したレアルードは、でもまだ

なんか不満そうだ。……駄々っ子じゃないんだから。

「提示された内容は、私達にも利があることだ。感謝をすればこそ、文句を言う筋合いはないだろう」

「……だが、」

「別れるのは初級の依頼をこなす間だけだろう。心配しなくとも、怪我をするようなことはないだろうし——」

そこまで言つて、ちらりと見た依頼の内容を思い返す。

……うん、まあ怪我はしないだろう。初級の依頼なんだし。多分。

「——それより、そちらの方が心配だ。こちらには経験者のタキが居るが、レアルード達の方は違うだろう。ネルが付くと言っても、依頼内容には関わらないのだろうし」

「まあ、そうね。どうしても言つなら助言くらいはしてもいいけれど」

……頼めば助言はしてくれるんだ。まさかのサービス。あとで頼んでおこうかな。

「こんな破格の待遇をしてくれるんだ。有難いことだろう。だから

——」

「――……分かった」

これ以上どう言い募ろうかと悩み始めたところで、レアルードがぼつりと呟くように言った。

……よ、よかった、折れてくれた。過保護癖再びとかになったらどうしようかと。

「だが、……無理は、しないでくれ」

……えーと、そんな沈痛な面持ちで言われても。たかが初級だし。命の危険のあるダンジョンに行きますとかじゃないんだから。

とか茶化せる雰囲気でもないしそもそも『シーファ』はそういう性格じゃないので、苦笑しつつ頷くに留める。

「……さて、それじゃ続きいいか？ とつとと説明終わって依頼に向かった方が良さそう？」

タイミングを窺ってたらしいタキの言葉に頷いて、タキとネルによる詳しい内容説明に耳を傾けることにした。

道中

受けることになった依頼がどんなものか詳しく話を聞いたその翌日、早速初級の依頼に挑戦してみることにした。

一旦『教会』に行つて、意思確認されたり注意事項やら聞いたりした後、昨日ネルから聞いた通りに二人一組に別れて、割り振られた依頼を遂行するために行動を開始する。

……ここまでは、まあ、よかったんだけど。

「さアて、シーファ」

にやり、としか形容しようのない笑顔を浮かべたタキが振り返った。

とりあえずその笑顔は胡散臭い上に威圧感があるのでやめた方が良いと思う。いや、場面的には正しい表情なのかもしれないけど。

私達が受けた依頼は、とある人物の家に届け物をするという内容だ。別の依頼を受けたレアルード達が出発するのを見送って、届け物を『教会』の人が持つてくるのを待っている、というのが今の状況。

案内された小さな部屋に二人きりになった途端に切り出されるような話なんて、ロクなものじゃないだろう。少なくとも私にとって。

……これで何度目だろう。こうやってタキと向き合うのは。
何をどうしてもやましいことがある（やましいって言うか、単純に隠し事が多い）のは私の方だから、この雰囲気になるとつい身構えてしまう。

「とりあえず、とつと確認させてもらうけど——お前、自分を対象に魔法が使えない体質ってのウソだろう？」

……やっぱり。

実のところ、何を言われるのかは予想はできていた。そして、実際その通りになったことは、安心するべきなのか困るべきなのか。

最初から納得いつてない風だったから、その内何か聞かれるだろうと思ってたんだけど、こんなに早くその機会が訪れたのは——まあ、イレギュラーが積み重なった結果だよな。色々と今更だけど。

「……ああ、その通りだ」

返す言葉と共に頷く。タキはいつも通りの笑みを浮かべているけれど、油断ならない気配を漂わせてる。

盗賊のアジトだった洞窟で、レアルードが説明した『シーファが自分に回復魔法を使えない』理由。あれは、ある意味正しく、そして間違っている。

『シーファ』が自分に向けて使えないのは、魔法全般じゃなくて、回復系の魔法だけだからだ。

『シーファ』はあえてレアルードに誤った情報を伝えていた。それは、『シーファ』が自分に魔法を使う必要がなかったからだし、とある事実を隠すためでもあった。

それに関しては『シーファ』の考えだし、私にはどうしようもない。というか私にとつても都合が良かったし。——あんなイレギュラーな事態さえ起こらなければ。

あの村での、『ジラス・アルレイド』の介入によって、それは諸刃の剣となった。隠したい事実を、暴きかねないような。

ここまで来たら、ある程度手持ちのカードを見せるしかない。勘のいいタキは、少しのことでも見過ごさない。ここでズバリ訊いてきたのは、最後通告みたいなものだ。

内心で深く溜息を吐いて、私は口を開いた。

「私は自身に魔法が使えないわけではない。身体強化などの魔法は問題なく使用できる。ただ、回復系統の魔法は全く使えない。状態異常を治すようなものもだ。だから、先日の毒についても自然回復に任せる他無かった」

「それは、アンタのあの体質が原因？」

「恐らくは。——君が、私が自身に魔法が使えないはずがないと考えたのは、初めて会った宿の庭で、身体強化を行っていたのを見たからだな？」

確信を持って『ウソだ』と言うからには根拠があるはずで、その根拠が得られるような場面なんてそうそう無い。

案の定、タキは「ご名答」と軽く答えた。

「やたらめつたら色んな魔法試してんなーと思って見てたから、覚えてたんだよな。でもアンタと付き合い長いらしいレアルードは知らないみたいだし。知られたくないのかと思ったから、アイツが居るところでは訊かないでおいたワケ。色々ありすぎて思ってたより訊くまでに時間かかったけど」

「……気を遣ってくれたのか」

こう、『いい加減隠し事ばっかしてんじゃねえぞオラ』的な感じで切り込まれたのかと思ってた。違ったらしい。

「まー、アンタなんか色々背負ってそんなカンジするし。迂闊についたら思い詰めて離脱しそうなカンジだし」

「……流石に、それはしない」

「そーか？ ま、それくらい危なっかしいってことだ。今回ののは、曖昧なままにしとくと戦闘中の判断とかに関わりそうだから訊かせてもらったけどな」

なるほど、そういう理由だったのか。合理的というか何というか。とりあえず『私』としては助かったけど。

結局タキはそれ以上つつこんで聞くことはしないつもりらしくて、その後は他愛ない話——主にレアルード達が受けた方の依頼の話とか——をしつつ、『教会』の人が戻るのを待って。

ちよっとして戻ってきた『教会』の人から無事に届け物を預かって、出発した、わけだけど。

……なんか、ものすごくイヤな予感がするというか何というか。でも何となく『覚え』があるのがまた。

大量の本と薬草その他諸々を抱えた私とタキは、着々と届け先までの道を歩いていった。

軽く変装もどき——って言ってもお互いの髪色を隠すために髪型変えて帽子かぶったりヴェール被ったりしただけだけど——をしたので、前みたいに角に差し掛かるごとにアンダーグラウンドな世界の住人のオニイサン方が現れるってことはないけど、何故か道行く人たちから視線が。

もしかしくなくても怪しいですか私。そりゃヴェールって日常生活で被ってる人ってそうそう見ないけど、一応この世界ではファッションとして浸透はしてたはず——って、あ。

……そうだよヴェールってファッションだよ。色によってメッセージを示す、みたいな風習があったりなかったりする感じの。

ただし、問題は——今私が着けてるみたいな青系のヴェールが、女性限定のはずだってことだ。しかもいわゆる——『売約済み』としての意味を持つ。

「……タキ。分かっていてこの色を選んだな？」

「あつはは、気付いたか。しょうがないだろー？　それが一番無難だったんだって」

「どういう意味で無難なんだ。むしろ目立ってるだろう」

「いやいや、一番顔も髪も隠せるのってそれだったんだよ。そのヴェールの意味もあって、生地が厚めだし長いし」

……言われてみれば確かにそうだ。他のだと大抵目元くらいしか隠れないんだけど、口元まで隠れるデザインだし、中からは問題なく景色が見えるけど、外からは殆ど顔の造作は見えないような生地だった。

だからって私本人の了解も無しに女性用のヴェール被せるのってどうかと思うけど。普通嫌がるよねこれ。キレてもおかしくないよね。

「……このヴェールを選んだ理由は分かったが、では先程から視線を向けられているような気がするのは気のせいかな」

「気のせいじゃないな、残念ながら。これは完全に誤算だったんだけどさ」

「何だ？」

「アンタ、口元まで隠れてる状態でも相当に美人に見える」

……何それ。

えーとつまり、この露出している部分だけでもついっかかり振り返ったり視線向けちゃうくらい『シーファ』が美人だってこと？

いや、うん。確かに有り得ないことじゃないけどさ、それどうなの？ この間みたいに目立たないように、っていう目的が果たせてなくない？

とは思うものの、今のところ襲われてないってことは多少の軽減にはなってるのかな。これでも。視線がチクチク突き刺さる以外は。

というか、それより何より気にするべき——もとい警戒すべきことがこれから待ってるっていうのを、『記憶』が訴えてきてるのが問題だ。

それは、『シーファ』の繰り返した旅の中で、避けられない、必須イベントの一つだ。

確実なのはこのレームの町に滞在しているときに起こるってことと、絶対に『シーファ』はそれに気付くってこと。

そう、それは、直感とでも言うべき、理由のない確信。

大通りから外れた路地。そこに踏み入って、二つ目の角。半歩先に行くタキの背を、思いつきり突き飛ばす。

と同時に足払いをかければ、不測の事態になんとか地面に顔を突

つ込むことだけは避けたタキが、地面に片膝をつくことになる——
つまり、姿勢が低くなる。

そしてさっきまでタキの首と胸、もとい心臓があつた場所を、二つの刃物が通り過ぎた。首の位置を過ぎ去つたのは糸と見紛う銀色。そして心臓のあつた位置には、投げるのに特化したナイフが。

「……は？」

いきなりの私の行動に一言言おうとしたんだろうタキが、珍しく間の抜けた声を漏らした。

……うん、気持ちはよく分かる。

全く気配も音も無く——そして明らかに命を奪うために為されたはずなのに殺気も無い。不意打ちっていうレベルじゃない。回避するための材料がないよねこれ。

まあ、それを回避できるのが『シーファ』なんだけど。

今度もまた音も無く飛んできたナイフ——ええとダガーナイフ？を半歩ずれることで避ける。次に足元を狙つて来た銀色の糸、もといワイヤーみたいな片刃の刃物を顕現させた魔法陣で消滅させる。迂闊に断ち切るとなんか悲惨なことになりそうな予感がひしひしと二次被害的な意味で。

最後に、回転しつつ迫ってきた——何だろうこれ。円盤状というかドーナツ型みたいなよく分からない刃物を、立ち上がったタキが剣で弾いて終了。

「——そこに居るんだろう」

路地の奥、ゆうに大人三人分くらいの高さの位置に声を掛ける。
意識して見れば、『シーファ』の視界なら見ることは可能だ。

とっかかりなんてないはずの壁に、足場として一本の短剣を刺して、そこに片足だけを載せて立っていた人物は、軽い仕草でそこから飛び降りた。

……怪我しないって分かってても怖い。そんな軽々しく下りれる高さじゃないよねそれ。

落下の瞬間に足場に使っていた短剣の柄を握って、壁を蹴って短剣を引き抜いたその人物は、そのまま音も無く私の前に現れた。

反射的に剣を突き付けようとしたタキを片手で制して、私は彼と目を合わせる。

「ねえ、あんた何？ 人間？」

問いかけるその声は、変声期を迎えていないのが容易に分かる高さだ。

シーファのものより灰色に近い銀髪と、ガラス玉を髭髯とさせる赤い瞳。

未だあどけなさの残る顔に、表情らしい表情は浮かばない。

知っている。『記憶』と『知識』が伝えてくるその名前を、今は

まだ口に出すことはできない。

ただ、その赤い瞳が、『記憶』を刺激する。——赤、紅、あか。じわりと滲む、広がる鮮烈な赤。

頭が鈍く痛んだ。ひとまず記憶を探るのを止めて、私は言葉を返す。

「——それは、こっちの台詞だと思うが？」

こんな物騒な出会い方しかできない、後のパーティメンバーの一人。

一撃必殺という意味では最も戦闘能力の高い人物で、コミュニケーション能力は最底辺。

『暗器使い』である彼と、ここでこうして出会うのは必然で、運命だ。——皮肉なことに。

シーファ私の言葉に軽く首を傾げた少年と、警戒を解かないままのタキ。

とりあえず、この場を落ち着けるのが最優先かな、と心中でひとりごちた。

少年

とはいえ、何をどうやってもこの場を完全に落ち着けるのは無理だと『記憶』が告げている。まあ当然だ。自分を殺そうとした人間と和気藹々と会話できるような人間はそうそういない。

ここでの反応はタキでもレアルードでも殆ど同じだから、とりあえず敵対させることさえ避ければいいだろう。

そんなことを考えていた私の前で、灰銀の髪少年がことりと首を傾げた。

「人間か、って——人間じゃないとしたら、何に見える？」

……うーん。知ってたけど、タキとはまた違った感じにマイペースだ。

というかそもそもその場の雰囲気とかに頓着しないというか何とというか。

「人間にしか見えないが、そうと思えないほどの身体能力だったから訊いただけだ。——君は何故私達を害そうとした？」

訊かなくても私は知ってるけど、今までの『シーファ』と彼のやりとりをなぞった方が良さだろうと思って訊ねてみる。

少年はやっぱり『記憶』の通りの答えを返した。

「独り立ちの試験だったから」

「……試験？」

怪訝そうに復唱したのはタキだ。油断なく剣を構えつつも、会話を止めさせるつもりはないらしい。助かる。

あの奇襲を凌げば、一応彼は安全なのだ。少なくとも一度別れるまでは何事もなく普通に会話できる。

……そうであると『知っている』。

「——それはもしや、『暗殺者』としての、か？」

少年は、少しだけ考えるように間を空けて、頷いた。

「そうだよ」

「……暗殺者!？」

タキが鋭く叫ぶ。無意識にか、握られた剣の切っ先が少年に向けた。それと同時に、少年が手を閃かせて、銀色の糸——鋼糸がその剣を絡め取る。

「……タキ、落ち着け。それと、君」

とりあえず、タキの肩をぽんと叩いて、落ち着くように促す。タキの反応は当然のものだけど、この場ではちょっと堪えてもらわないとならない。

いやまあ、暗殺者とか言われたらうつかり切っ先向けちゃうのは分かるんだけど。

でも多分現時点だとこの子ってタキより強いんだよね……。これまたうつかり殺^やられちゃったら困る。

どこか迷うようなそぶりを見せつつも、タキは剣を握る手から力を抜いた。それを察した少年もまた、鋼糸を引く。

……あの武器、どうやって操ってるんだろう。なんかもう人智を超えた感じに自由自在に動くよね。生きてるんじゃないかってレベルで。そんなはずはないって分かってるんだけど。

「何？」

「その試験とやらは、まだ続行しているのか」

今度も考えるような間をおいて、少年は首を横に振った。

「帯剣してて、そこそこ戦えそうな人間で、最初にここを通った奴を殺すのが試験だったけど、あんたが助けたから」

何でもないことみたいに言ってるけど、内容は物騒極まりない。

無差別殺人もいいところだ。

……いや、一応選んではいるのか。だからって物騒さが軽減されるわけじゃないけど。

「……………」

じつと私を見ていた少年の姿が一瞬ぶれる。
シーファ

同時に飛来した——なんかクナイっぽく見えなくもない暗器を、顕現させた魔法陣で反転させた。

目視するのも難しい速さで飛んできたそれが、同じ速さで投げた当人に返る。

どうということもなさそうにそれをキャッチして、少年はほんの少しだけ不機嫌そうな顔をした。

「……………なんで防げるの？」

「君こそ何故攻撃する」

質問に質問で返すのってアレだけど、この場合は仕方ない。だって『記憶』にあるよりしつこいんだよね、何故か。

いつもなら試験について言及した辺りで、試験の成否と今後の身の振り方を確認しにさっさといなくなるはずなんだけど、今回は何が意識に引っかけたのか、まだ去らない——どこかこの子またなんか投げてきたよ！ 怖っ！

小さい曲刀——半月刀？（曲芸用のナイフっぽい感じ）を、仕方なく新たに顕現させた魔法陣で地面に叩き落とす。

……もう魔法使うときに『呪』いらないんじゃないかな私。

その後も投擲用の暗器を投げられては魔法で防ぎ、を繰り返した後（とりあえずこの暗器達どこにどうやって仕舞ってどうやって取り出してるのか気になる）、少年は何だか感心したように呟いた。

「あんだ、変」

……言うに事欠いて、『変』。

それは君にだけは言われなくなかった……。パーティメンバー随一の変人に『変』って言われるなんてショックだ。

というかそもそも会話無視して暗器投げてくるような子の方が変だと思っただ。普通。

まあ、さっきの問いと同じ意味での『変』なんだろうけど。

身体能力と使う武器の関係で一撃が軽いつていうのを差し引いても、この子ものすごく強いし。だって攻撃がほぼ見えないし音もないし殺気とかも無いのに一撃必殺とか。予兆も予備動作も無いってどうなの。

それでも『シーファ』はそれに気付けるし避けられるから、『おかしい』って言いたいんだろう。多分。

……あれ？

ふと気になって、『記憶』を探る。

一番最初。一度目の『旅』の時、こんなやりとりじゃなかった、よね？

——ああ、そうだ。

一度目の時は、殆ど偶然にリアルードを庇う形になって。

短剣が刺さったのは掌だったけど、それにえげつない感じの毒が塗ってあって大変だったんだ。『シーファ』、体質的に解毒もしにくかったし。

で、殺し損ねたからってちよいちよい暗殺の標的になってるうちに、なんか何となく仲良くなって（？）、仲間になるとかそんなだったはず。

だから、『シーファ』がこの子の攻撃に気付けるようになったのって、二回目以降の『旅』からなんだ。その余波で仲間になる経緯もちよっと変わってー。

……じゃあ、そもそもどうして『シーファ』は気付けないはずの攻撃に気付けるようになったんだっただけ？

そう考えた瞬間、頭が痛んだ。見つめてくる赤い瞳と、『記憶』の赤が交差する。

痛い。

熱い。

苦しい。

戒めるかのような痛みに苛まれて、刻まれた陣が熱く疼いて、息が出来なくなつて、何もかもが遠くなる。

苦痛に喘いでいるのは『私』だろうか、『シーファ』だろうか。

この感覚は、『今』のもの？
それとも『過去』のもの？

——『誰』の、もの？

「——シーファ！？」

はっと我に返る。

いつの間にか地面に座り込んでいた私を、シーファタキが片膝をついて覗き込んでいた。

痛みも、熱さも、苦しさも、その残滓さえ、無かった。
まるで、白昼夢でも見ていたかのように、何も。

『記憶』に引きずられたんだろつとは思っけれど、その『記憶』がどんなものだったのかが、既に曖昧になってしまっている。——不自然なほど。

ただ、感覚だけが鮮明だった。『記憶』と『現実』が判別できなくなるくらいに。

「おい、シーファ。意識あるか？」

再びかけられた声に、ゆっくり深呼吸をして意識を切り替える。恐らく、今考えたところでさっきの現象については何も分からないだろう。そういう確信があった。

「——意識はある。大丈夫だ」

「いやいきなり倒れるみたいに座り込んでそれは無いだろ」

「少し立ちくらみがしただけだ」

言って、立ち上がる。身体に不調は感じられない。——感じたと思った頭痛もどこかへ消えてしまったらしい。

「……アンタ、弱ってたの？」

空気を読んでるんだか読んでないんだかな感じで訊ねてきた少年に言葉を返そうとしたけれど、それより先に少年はひとつ頷いた。

「——そう」

そして、一瞬でその場から消えた。

『魔法』よりよっぽど魔法じみた去り方に、何となく疲れた気分が溜息を吐く。

何が「そう」なのか——何をどう納得したんだかさっぱりだ。少なくとも『記憶』にはこんな流れは無かった。

……なんかこんなのはっきりな気がする。

少年の奇襲の時に反射的に放り出してしまった届け物を拾い上げる。

薬草だし軽いから大丈夫だと思うけど、どうだろう。とりあえずタキが持ってた（そしてやっぱり投げ出された）本がちょっと心配だ。

「シーファ、」

「予定外のこととは起こったが、依頼を遂行するでしょう。そちらの荷は大丈夫か？」

何か言いたげだった（多分一旦戻ろうとか言おうとしたんじゃないかと思う）タキを遮って言えば、タキはあからさまに深く深く息を吐いた。

でも結局、文句も何も言わず——少年のこととかその他諸々は今は置いておくことにしたらしい——届ける予定の荷を手を取った。

「あー、うん。大丈夫だろ多分」

大して確認もせずにそんなことを言って、更に私の持っていた荷

も取り上げる。

「タキ、何を――」

「とつとと行って、とつとと済ませよーぜ」

それから絶対休ませてやるから覚悟しとけよ、って聞こえた気がしたのは、多分気のせいじゃないだろう。

いや別に無理してないんだけど――って言っても信じてもらえないのは分かりきってたので、せめてもの抵抗に自分の担当の荷物を奪い返した。

タキはちょっとだけ不満そうだったが、更に奪い返したりはしなかったたので、そのまま路地に入る前と同じように連れ立って、届け先へと向かったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5674w/>

異世界チェンジリング

2011年12月13日02時54分発行